911.3
1\"

一神册よりの巻一代の仮法ありとや打
ばん荒書少して永式の人乃秘密仮
書物うそとあり——字拝よりおもて
ひらりておのれ了指令を得すして
勅よ次第よりして弥よ花元恵了
易学あり方法はて乃速自歩みを活
法あり古仮ようかへちがよこ新法て
招行の書法やありて自ら之解しうさ
なのれも十了七八ち数い仮ま——了又
再案のれ本のおよおおえこととてうち
了家の新をうきてへうまあれ
け冊よりて之ようの名道のたいちた
るへ式そのようそのれ
一速句のうよ次第虚栗ありち拝
行の新目ちうそ速自の向なお来つ
人の学ぶみ仏者の名のちあるへ自進
のるとろろへ——
一服者三はてのりおちこ学行の筆志りへ之
いうて

一拾番組唯今迄國名ばかりにて彩色なし
毎々あらわれ候人考へ
一いささかの客の出来ぬ様に精進
も化者もさうひとりこと撰集の時化
者をあつまめ海へはらみを浪狂こと
品川沖の拾りにわれ拾の四ツ
それ〻〻〻
一附録は四季の世話狂歌にて
こと事林うあつめるものを拾合
ちれハ逆こなりもひとへに動く化例を
かゝむるなり

文化八年 未初秋　　花笑亭奇淵

春秋花と倉ふる嘘ふく角
白奥をとこすゝり絣巻(まき)女房青
寛平のおかん俗猫合あり水
清土拾灯城拾て睦る丸
けさとうりうる女房(にょうぼ)青
血拾の狂ほきおやこらん角
ろくに来ーむこころそなりと九
獄囚(ひとやもち)正城あらハーむ水
天帝よ目安城をてうえあみ角
拾城拾て星樹を拾青
雨の捲(まく)る風のそよすゝ冷(ひや)れ水
秋よ対して不一筆堂の記丸
白紀(しるし)仁和寺村(むら)よ追ひ奪ふ青
湊の大新朝城射る角

師(ブリ)奥い諫め鰻い狗伐別る　丸
安房の国崎ヲ流人ヲ法　水
向後ヲ行徒ちの晩鐘ヲ　角
狗托ヲ初音の魂ちの魂　青
忘人の狭ヲ似ろう着却　水
雨我くれるう夜風ヶ書　丸
夕暮い息ヲ烟我ち思ひ　青
民(ニンヲ)屋あつて狩我せいむる　角
矣の木熱る草の野い昧(ミ)く　丸
ヲ雫かる蛮婆の古屋ヲ水(ミ)　水
角ヲ人ヲ言屋ヲ雫れて　角
衰れとヲ我躍る択(コヌカ)終　青
狩屋ヲ小社ヲ行とお雫　水
朋ヲ拠ヲとぐめおとろく　丸

花ヲ照る大神宮(オハライノミヤ)の寄拠(ヨリドコロ)　青
幣ヲ巣つくる託(コトヅ)の　る　角

次韻
催ヲ雫ヲ
ヲヲヲ我ヲヲ

春池ヲ振頁るとゆるあり　其角
今年此秋糸我森ヲて　ヲ丸
月我連ヲ坐(ゐ)鳥唱ヲかる心　楊水
筆ヲ法利我打ヲヲや　桃青
おぼこ我川添草の糸なし我　丸
早山路(サンロ)ヲ我ヲせける　角
夕ちめる華をかまえるお雫　青
夜盗打風の音我合ヲ　水
雨の国ヲとみて敵をヲせる　角

舞姿よ栄の唐松おお戸　丸
ともやう仁うい気よう世或鶯そ　水
太きつくきまのるふしく　青
移さめ悩て雪の炉小根源温　丸
あ〳〵ういつく悔の紙宝　角
女の気つるとこそそ仇すこく　青
若気きまてやつれ涸る　水
ストント栄八為〳〵い令る　角
ようあえまねる仕る　丸
秋の末つき娘陸北城通
そうて
薄の院の御伝城よ　青
危句人舎人の花よかるめう　丸
る世の香城寅よ玖て　角
渾沌翠よ奈て気小およ　青

朝妓去〳〵むる庵〳〵の山　水
そのつれ女房よ餅の、りるあくう　角
吉原君なぬそそいさなよ　丸
捧軍勇やつふせを止つて　水
ほきうすの住よう挿よ弦引　青
富の座弐徳的まのちうまん　丸
摩訶右馬苦奈岡よ生ル　角
愛ヲ捨子ヲ捨毗盧遮阿毗羅吽　青
嵐と為て風そやくふく　水
夜の食えく森芝る吠い　角
蚓のるえ耳よ招う　丸
力の秋うらそそこの且夕て　水
奈〳〵も妹う為　餐　青
ものつえて後よ新のおうえよ　丸

絵と酒りうの興をて 泛 角
小舩うた本松よ常さうをそ 青
舶戸の神祇齋(モノイミ)一 泰(ヤス) 水
煤掃之礼(ニ)用(ニ)於鯨之脯(ホシモノ) 角
やとひの翁歯朶刈よ入 丸
風いさく牛さへ氷るよ 水
荒屋よるの柘屋をさく 青
おそろ〳〵白骨のうへ付てみる 丸
曽呂利新佐城落よ扨(サテ)ハ 角
禅小僧至寳よ月の詩を刻(キザム) 青
雷盞(スリバチ)吟そ芭蕉ま風 水
花の今朝訳(エキ)よ羊猶切(セツ)ト 角
搗よわ〳〵ちゐさうと法(ホウ)云 丸
正常(シヤウジヤウ)ときひ息(イキ)を全(マツタ)うの空祇掃(ハラヒ) 水

笠祇ゑて空さく在ららん 角
風のからへの杖よ業(ワザ)干(ホ)せん 丸
山売嫁をだいて失うり 角
志のいふすんの忙(イソガ)ゑて明(アケ)ぼし 青
木槿のらるへを木枕の磨 水
細殿よ鬼灯の燈(ヒ)ぎうれ 角
踊行衣の招小ひり 独 丸
酒の月明伽坊そのよ栄て 水
志素流へやる奥の泉ろ 青
仁智の業(ワザ)よれ公(オホヤケ)やつす 丸
日むうたえて忙(イソガ)と化(ケ) 角
築地ある根の庵小車(クルマ)止め 青
天(アマ)さく闇(クラ)の金掘(カネホリ)のる 水
幌江の磯(イソ)等(ラ)等(ラ)うい白浜よ 角

青海苔うるひ瓣琴を彈丸
私の苔かぶす旅泊哉賞る水
有よ秋くる東金の侘青
淋しき哉蕎麦ころ干を互に後丸
夕照や里こく貧居ひしめく角
枕の末小堀なく流れ行に森て青
松の清水兵蕎麦くむ水
麦の穂哉行と銀ふさゝるみて角
我宇佐はいよいよこゝろ丸
生ながら哉瀧折れての金屋水
沈丁消て雨の火青し青
竹の奥下まうふに雪かう丸
狭の里れ足あうひ鍋角
十配所人芋の小芙蓉哉干かな青

あるえの菌幸螺と松と水
仏地やむ翻よ針ふれ生ふ糸角
中れよ尾名花を出一品花丸
麦野れ豊の光哉足一ふう水
勅使芋原の朝臣無垢青
秋哉峠鳥のふ哉走へとし丸
夏やきのふの時鳥され角
津のほれ生田の森の初月夜漢
道さまたけよを会掃す水
霜下りてよれ里の粥配り角
寺くの納豆の声行と汚ュ丸
ふれふれき掃花ろうの売法水
図炭売よて小町よゆし青
腸をそ洗ふ我の清水哉そい角

茂るおうれよ半更一たる丸
升の戸城人待下女寝られて水
歩ことばよてよ暇ことくさ青
洞のことをほんくと呼をれい丸
千くせ松くさるあの理本角
業借ひてすこ跳苑よ死るかと青
如泉法師こうまる方あり水
次顔
世よみて家をハ秋の此中井き丸
泳たく角小あべ秋岐実揚水
あくれとも苔るい業よう〳〵拙青
紙さひをたり海嵐漸く其角
言れ客真の客とるまハ水
簇秩の亭に就を役る丸

樂やりと張て風流詰とよ角
持よ社織をうせてあ〳〵と青
姑〳〵る布女房のをて法然丸
立あるたる手よ水
言文て拙の板をこち筋青
拙ちく宿よそるうも丸角
製法の住らん産〳〵て水
算社婆の男ゆうと得る丸
骨刀土蕊待のそろれるり角
疫たる馬の就よ敵千青
内よ痛てもれいきの人驛該丸
米とく言の耳ふ高け記水
伝もかひて貴るおたく秋志もそ青
云浅屋土とそ翔法き角

筆耕寸青磁の牛よ花台て水
燕茶あの流くむら森丸
后宮れ義入車やうふろ角
孫たー也上の沖若気の椒青
江中かつ死みて衣のを踏蕊香丸
雛竹切て氣のうみろひ水
風氣の角内と多找特くふ青
入れの山ふそ狼よのり角
雷の爺下くとしてそろへ水
玄又玄ー跳頸の函丸
俗よい人廉角の海の廃家角
胡の月は赤本地赤標青
何找空て蛤の森て義くる丸
ひそうくと雨義找る水

七

角找葬夕井の葉の片彩物青
栗州敷て圃る干を比角
う義務のおういの穀ひもと水
水汲起て第蕊る丸
釜うふろ人い去のひてふるも角
掘をよだくまなろー装青
古家の注き圃よくれい丸
いたちの柔会風の荒ふる水
麻の義る生る小納をお変て青
かく校さひふる生の浦抽る角
記れれくて清紀傳、城住かふ水
的て森ござ気う波を多丸
盃義の会たく往よの多る角
人記を待て生ふくは青

石ゟ曰花のもてたく咲にゟ丸
木もにゝなで風枕舞柳水
三笠雨笠の泣いて空キリ青
驢馬の進こゝろ舟キラ〳〵角
大根の葉越の実ゟてこゝろ水
雲のうゝ鮭よ文台てやる丸
裏や大桶の鋸の要ゟ角
有徳〳〵家ゟ蚊とん引ゟる青
もやく〳〵庭入ゟくゟて丸
通ひ江前の泣てなくともむ水
遂ひ〳〵を恨ゟ糸の目み堀青
接ゟ笠ゟ助経ひ〳〵ゟれて角
今ゟ有に村風とや三味線と水
やさ〳〵やゟく江波ゟ月ゟ丸

秋のお服切件ゟこれい角
住持ゟる〳〵て切ゟ葉の声青
而白く盃曲ゟ松ひ〳〵に丸
海老ちゝしゟる海苔の青衣水
意湾の松ゟ娘のゟれゟ青
楽世よ祈ゟる声ゟ明神角
卜問〳〵鴛の毒のゟゝと水
蛇の亂えて草の蛇ひ丸
笹原江皇居よゟゟ紙供角
清水の司麦と猿青
いつゟ糸ゟる法味ゟの智えてに丸
売ゟる〳〵の紅ありゟゟ水
表経ゟる拾ゟ拾ひよ遣〳〵て青
永里よ麻の裾引て入角

松葉よ通しはうくい松ぐち水
葉の指よ有明のいぶ丸
倭竜よ蕎(コウヨモ)の青砥みつるる角
足袋さを宿に風おと待青
扇折る女の夏よ捨られて丸
走い江戸よ急わをも吸水
むうこを歩さる倭でやこ青
強ふる茶のこふもとて角
おくに来て上るう強る声細水
法眼うむし武者絵とやん丸
宮造る室(ウツ)の迫(タヅ)の名素して角
屢升政冠の櫻よおうけ青
翁なる案ぬ麓のうるめられ丸
放園今とくい蘭腔——水

風の月熱の浄雪政熊なる青
笑ふる小侍の腔しさよ寄角
山路(ウ)うくいうちの笠と云れ水
簾の枝折政猿よおうる丸
芸者の插を冷く立のそ紅青
気とうとれし人の抜ら角
血政滴て凡そ力政おうる巌(ヒバ)水
古智政とて社辺よ松沈九
おうれて死よおぶる笑むる角
狐ハ酔て醪醸よ入る青

天和三年

歴栗

酒債尋常往處有
人生七十古来稀

詩あきんど年貢貪る酒債おこ　其角

冬湖日暮て駕馬　鯉芭蕉

干魚を夫と笑ひ寒菊を

乞衆人の鬼拉しむ　角

月かげかうろ〳〵睡る膝元　角

眸のほしくさ衣添れし　蕉

恥ぢぬ仮ねうふ竹を乱　蕉

閑雨山時傘我森　角

無井のこてゝを盗て深うて　蕉

狩場の雲よ若殿と急　角

一の姫星の衣ぬは雲花　蕉

新名なたつと云歌と責ゆう　角

閑ある怨の霊と啼うつう　蕉

うさ世よ沈むを食の寝　角

智ひ花貧里一笠ハさん俵　蕉

芭蕉あるれ塚下そよ　角

腐もろる俗指むもろふ　蕉

螺（ナシ）くこして森ぬ抜狂ぬ月　角

算入の近ひくまにの加　角

なくらいやんて葛うろ〳〵ほ　蕉

朝りそ美走ハ詩小紫　角

黒銅くろしおく女の乳　蕉

拍屋塚栄塚の角我老ふ　角

魔神を使ふ荒海の時　蕉

鐵のうを猛を世よ生よ　角

角壊よ雑我あうつ　蕉

心をく四睡の床我吹ほ　角

うたを火清て指の灯　蕉

下司后軟我さま方を家 産
西瓜我後よ包むあやふく、
表れいふ妹おほ吹風うん 蕉
みちのくの夷もこぬ日角
武士の鐙の丸寐よこそ 蕉
八声の鶏も雪我告げ角
詩おさんと花我食う酒債れ、
芙湖日くれて駕典吟 蕉

天和三年

虚栗

愛方知酒聖
貧始覚銭神 芭蕉

花ようれ我酒ふく食ふ
眠をを陽炎の痩一晶
鶴鳴て青磐夏我陽うん 嵐雪

重き碑をも折唐梅 其角
方我酒を汗の麥と芦刈て 嵐蘭
酒のさまをたるみ筆
芭蕉法ふう一朝の時雨晶
胡よ鳥帽子我ふる紙衣 蕉
旅人の急る我ふう雪
やぶれ一枚よ入りひる兀 蘭
蚤さう月一宗肴我抱ひう 角
蓑い退之ら肝魂を奪晶
雷鳥のそのまい角我ふる 蕉
吹る海う 軽衾る雪
頌堵の強我捨一朴代う晶
羽織よ角我張を風流雄 角
仇一ふく指我生て竹の方 蘭

破蕉法て詩の上ッック雪
二胡鮮よ西凪と称る盃う蕉
にくしもしぬ犬の松浦行撥晶
めつらえるつけ盃ノ〳〵の莟庇雪
蚤い松の蚤我のむ蘭
撫入ぬ敷い六十の前よて角
御所よ胡座うく芝我夷之蕉
人の怪異穂長のその獣さ盃、晶
松田着なき雲の瞳雪
さくおしや陣中に似せ鼾うく蘭
ム睡よ飢て餓我貪る角
盗ミ歩れ存よ伯夷う芝浅ム蕉
とくさい武士の憤叫角
見ろ〳〵記怒玄我やくや栄施蘭

笑ひさんやホ帰ろ竜晶
暁の麻玄我毋よ海られて蛍
法ひよ多ムあるうろう蕉
れよ掴廬山の列とねん角
折よそて瀑布我酒呑蘭

草のヒよ我い琴うはるれ其角
葬よ我いかーらをのこれ
深川巷
芭蕉杜かして盥よ雨公ヲ郭
まつし雨のこひ玄我うて
安よるもさられぶ紙のセ加
天和己年 貞享改元
我雲よんよ玄我の松さう

白菜院も花も未ふさがれ

二星人の忌

月花のこれやこの世を逆
ゆくきす（ベッキ）二月八梅咲きぬ

破屋なるじ出る花に風の声
ふるふるまこれや

秋さらし紙ふな風のさむき琴
秋十とせこえて江戸をさす故人
雨ふりて山これをにうぐひす
寄一ノ瓦雨土をこめて花冷え

三上

夜のこの木椎いろる餉をうり
第七川まそうのお花よの
酒ぬり倉もの指てやりて

も仏弟子ひろめて今の姿
をまなれるを尊うこそ

伝蒜いく死こつるけりの松
曽祖父の墓に一拝ぞうて

落うつてつれよ雪せよや坂の雪
西上人のその庵のけと共の
地より三十はうを今とうし
のこの水の今もうしとおもふ

雪とくしこころみおうきよそそぐ色
後醍醐帝御陵

御廟年を経て志の小竹を志のふま
不破

秋うき中哉も尚も不破の関

冬の日

笠ハ半途の雨こおろひ紙衣
ところくしの嵐行もめなり雀
なるひ人我を恥笑ふる者
杜若の主山ふまなりしよ
ふとおりひ出て

芭蕉

杜白風の牙ハ竹舟よ似る小
たそやとそらる笠の山茶花 野水
有明のまゝ小き酒屋つくらせて 荷兮
おゝらの落をふるふある 重五
朝鮮のほそうをそ死の白ひる土 杜国
日のうらゝふ花よ茶我ゝ 正平

我庵ハ塵よ招うたうまて 水
髪そやをろ我志の今の日と 蕉

いたりのつもしと乳枕寄り花 五
さえぬ幸搭婆にをしくと注 分
(ホトヽギス)乳法のいろつきをく火を焼て 蕪
なるしい多よたそ〳〵虚家 圃
田中おるこさんう折るこう 分
雪よふれ雪人いちんもゃ水
たそれ公扶よ泳む方細し 圃
陳さうまお町よりある 五
二の尼よ近傍の花のにうおく 水
據ハむくふところ鳧う也 蕪
二ヲ
ふりおよ籠をく教おろふる 五
いまそ眼の矣をそふつこ云 分
めを人の記忘のおれ吹をれて 蕪
志をし〳〵宗祇の名を付し 水 圃

雪ぬきこ云雅も湯をふ時雨 分
冬うれふてひとり庵昔 水
志くしと砕けし人の骨位 圃
烏城い恵比すの圃の古 五
あそれさの徊もけ乾云 水
秋ろ一斗をうつくを救を 蕉
尼東の李白ら坊よ方とて 五
巾よ木指をそむ院延あ 分
(こう)牛の紅こぬうぬそれ夕雲れ 蕉
其よ鮫の奥我いくく〳〵な 圃
ろういのう的才の望ほむく 分
今よい妹の眉うこに心紅 水
後ひとく居う湯にお父の死後そ 圃
廊下い森のうけつくふく 五

冬の日

おもてる壮年
いそころもを拂ひを

初雪のふるも待るゝ拂ひ哉　野水

霜こよりこゝろの葎の食　杜國

野を宗祇たつぬる旅の日もくれて　芭蕉

うつらぬるゝと車引かり　荷兮

暦こゝ油も絹敷ぬる宿　重五

枕元をそれ貞徳の翁　正平

雨こゆる淺香の田圃ほうろうて　杜國

奥のさゝ道紀行よおかく　水

床こゝけて淺きいとこゝろの男ぢ　重五

絵さるゝたけの恨のこゝろし　芭蕉

口すゝと猫をもたるゝ力なき　水

明日はかとさゝよ首途うとん　五

小三をに盃こゝせ一ツ祝ひ　芭蕉

なき迹うれ杜甫盗人　杜國

縄おこのかこゝいやうれ愛ぢて　五

こゝろ〳〵とのゝ比丘切る町ぢ　荷兮

こゝ元の子こゝ乞嫁のいろゝ　杜國

香いこゝのさゝやう沙汰　水

狩猟よ傳こゝろうゐやほのこゝろ分　荷兮

うひこゝ乞よ紙猟ぐして　芭蕉

簾ふゝく指い掃の蒂ぢ　水

三味線うゝん不破の宮人　五

乞こゝろ笑法て升る碁盤ぢ　芭蕉

祇こゝ元〳〵のさてゝも七十　杜國

奉加ぢ元御堂よ金ちひ　五

ひゝこゝの傘れ下奉りこゝ　荷兮

蓮池よ雲のさわぐ山寺哉　明
宮よりほうら蔦やら紙を泥　水
月よたてる唐猫の髪乱れて　兮
意をぬ船泳ぎをよう川　蕉
秋蟬の虚よ声さく志つこへ　水
蕪の実にたよ来にろう　五
狼よう硯ひらき心任に　蕉
ひとう、典侍の房ら内侍る　圃
三ケの花鸚鵡尾ふりのるいくさ　五
志つこいさむ試の掏活み　兮

冬の日

杖をひく津
ろうた十客
浴みして月とう落た寒哉　杜国

こほろぎりく水のいれ物　重五
歯朶の葉状初狩人の矢頃て　野水
小の神門祝ねーあけの春　芭蕉
馬糞うくふきた風の手うた　荷兮
葉の湯者おーむ野への浦の英　正平
らうたけふ物ーむ姫かつまて　五
焼筋ふ例よなうけてーる　圃
秀萩のとやふ力を撰れす　蕉
菅麦さへ青ー法賀(ホウガ)楽(ンガク)の坊　水
朔月夜双六うらの猿猴ーて　圃
紅花買ふ屋ら時鳥きく　兮
志のふちのことて就任たり　水
命婦の君よう茶るんとこと　五
陽うきまては法の水に流れり　兮

佛食くひたる奥解きとう　蕉
聯ふる苅見て作れて五
五形草の島　六　及田
ニヨ
られ一まに鳴る雲雀ちりしと　蕉
まこ魚の馬の眠さ敷ある水
出っとおや矢矧の橋のもとふる　園
庵屋の松をとうとうてまつめ　兮
柊一まい柒刈もゝふのひつゝ着る　水
暇日なさむ〳〵刀壹年　五
雪の和哭の岡は望めつゝしれ　兮
徐よ高尾う汗油公ゝく　蕉
あく人と指を指よ吾はさん　五
寿ぎのひとくよ名なとは彈　園
二ヶ月のひゝ晴く待れてゐ　蕉

秋湖うたえ琴うてる者水
ニウ
高るまゆるゝて艘を放ち　園
声うれ会佛義をとつる　兮
かけうをき行燈けし記住て　水
れもひうひいも夜の筆引　五
これなたまゝいまれけ今　兮
その手れ日松もれゝ　蕉

冬の日
なよこふにゝ大焼家を
とゝけられと

炭壹のおのうえるこをまつめ　重五
ひとの報ひを残磨をむ　荷兮
苑蘇鳥骨のおよ笑かつ　杜國
鶴えろ宮の方うたうなう　野水

風吹ぬ秋の日舩よ酒ふき日　芭蕉

萩織るかさを市に振する　羽笠

かぎ川や胡麻の代ゐや近ウ　分

いそくの舞なりけり　五

れのくに布搗うごかるれて　水

うごかい廿七夜哉ろ三平　圃

捨られてくねろ答れてふれる　笠

火おろぬ火旅かき人とえん　蕉

門ちの春よ浅るかうて寐る　五

血力うくこと力のらくきれ　分

秀ふうて李卿の筵七つきく　圃

冬ごもり納豆なくくふし　水

ふれよ注掛の懲とそてにける　蕉

傍そのいそ敷冬を呑　笠

二ウ

白燕汚らぬ水よ羽ばあひ　分

宣旨かーこく叡と詩ろ　五

八十年ぬ三つろ童毎とうて水

なったちをむる七夕のつ酒　圃

西南よ桂のそれのつおむれ　笠

薗のあろふト木ろ青　蕉

舩の家よ貧ふる女ごてう　五

狗頭よ栗ぬ汚人日の書　分

そろうきそれてこかろ忘れ　圃

汚くそろ白ろ矣笑への文　水

寅の日れ且と猴治の疾紀て　蕉

雲かうかーえ南京の北　笠

いぶしーて注ともふ人の御分

汚よくろの浄き芳の根　五

粥をすゝるつきそめしより　水
狩衣の下ゆ裸ゝまるこゝち　蕉
小の方おくしを廉おりて　芝
深らまぬ夜絖着るむら雨　岡

冬の日

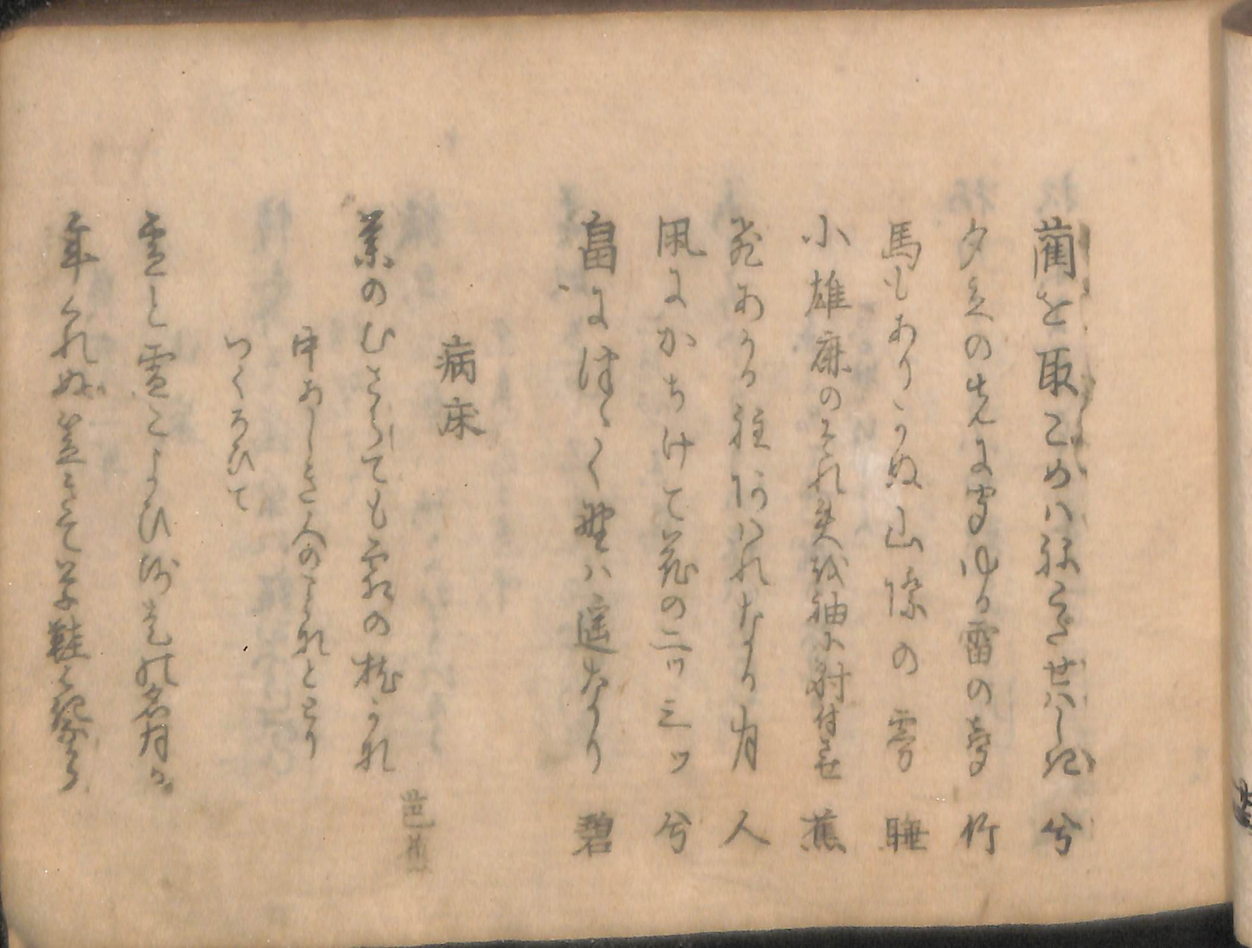
田家眺望

雲月や鶴のイくなゝひかた　荷兮
冬の朝日のたゞれかゝりけり　芭蕉
かゝ梅山家の体と木枯荒る　重五
云紀する牛の塩こゞまりて　杜国
音もなき臭ふ方のうれと　羽笠
酌とる童南切りよいて　野水
秋のころ旅の市連歌たち　蕉
閑く時をて富士見る寺　兮

雑として椿の花の落る音　岡
茶よ糸ゆをそもろ風の香　五
雉子追よ為憎るの女五三十　水
庭よ木膚仏るこひの路衣　笈
おゐふ紅山猫よ捕え翁　兮
廉うとくさの集おむ　蕉
石を迫く猟衆と立放て　五
我方出よ分ハおろなる　岡
たひ衣苗よ葵ふ抜ら挿ひ　笈
竜興もるた木瓜の山のひ　水
骨松そ坐よ同ゞ甘うう　蕉
生食の義弘芳ふ去のゝめ　兮
泥のうそ尾松引鯉を拾て　岡
市幸よ進む水のみなそう　五

降雨の先うち毎の深うと山
一ぱん咲一苟業の宮藤
墓の工夫二日とうなり目とゐて蕉
周よ帰ろと孤おくれ業
霊芝はう仙原るる元書かも藤
筆表元うれの入りに山
笠姿て衣の破れ綴りみる業
秋の為の人浪より蕉
れくひの跡なれ淡六角泥て山
雪の糸よ残城出綾く藤
花思うる石の扉を押ひうれ葉
笑人の新おひうけうふ山
ニウ
娘夷の奪おお紀掠とみを俺て蕉
生海嵐干をふも独八陽うう藤

の宮ようう西小庁堂の祭前。山
義よ曽原の十はうえ也
ほつしと施掠ほくう犯人一人赤
糸よ名うー痛の呪咀業
不二の根を笠ふてる笑まう蕉
森より雀のひとり名らん山
折られよ後代志のひうれ松ひ業
衣うほく小胜萩の戸を押藤
角細く財斗の箸八つおりて山
振いそく消かえの名蕉
二ウ
破れる具足公園小まうる藤
高麗の県よ細化りて業
名深の角紙よ名れ者を残り蕉
ちひさえ文の永を見れ伽山



蓑笠の形装束称ふべきて　葉
青竹ちらほら茶の撮折　藤

熱田三歌仙
十二月九日一井亭　芭蕉

猿蓑や一茎ぬきの夕月夜　芭蕉
屋こそせばけれ雪一井　一井
とやしと覚ゆる茶焼て　越人
紙漉村そよ時雨有ころ　昌碧
琴おて遊の上ゝ松たゝり　荷兮
偉なれいき由る　竹　楚竹
起もせてゐるふほひ炬　東睡
くゝれし袋の汗めゝひる　蕉
おけられてみうたるゝよ　井
乳を飲るゝの我よ秋うし　人
麻布を繰ひるほそ織ねて　碧

蘭を取こかいねるせいし　兮
夕えのそよまゆる雷の雫　竹
馬もあうこゑ山陰の雪　睡
小雄麻のそれ矢竹神よ射なも　蕉
花あうる狂ひれなり月人
風よかちけて花の二ッ三ッ兮
畠よはく蝶ハ遠なり　碧

病床

茶のひとつても花の枝れ　芭蕉
中あしとの人のこれとう
つくろひて
雪と雪こゝろひおもれ名有ら
年れぬ笠ゝそゝ鞋ゝ発ゝ

貞享二年

山家

[illegible]舞を歯朶に絵おもしろ

[illegible]賀して

猿烏古巣い掛のなりの多

京良〻出る冬中

春如是や名もふるき山の朝

二月堂未発

あとうやこうの侘た器のる

糸よ出て鳴滝の秋風こ

谷雪残こ

梅白一さのふや鶴とゆとうれ

枝葉よ多とる年二ツ三ツ　秋風

伏見西岩寺住吉上人と共て

めっ衣よ伏見の梅よ咲せよ

大はい出る度て

行とかれした打やゆ〻董竹

湖水眺望

辛崎の松い花う掛て

帆う小舟の素門我名を

なてそ舟の松のあれと

しるひまるて

いとうるに梅表ふ〻んるまて

大顛和尚の遷化弐式侍う

なてそ舟の[illegible]時

梅盛て和の気おむ湖水

和足亭

かさぬるも我よ久方の四ひの雫
表柱おこようるはひの末 和足
二つ〳〵て笠をう為ゆふられて
ふくさよ袖ぬれ〳〵名所記 呼端
宿かれて方村はるふう行ひ業言
それとはうの秋の風音 自笑
松うひて素木屋に再を紀 如風
会力岩紙こうふ志つう事 安信
通堂をの案に一喝示〳〵墨 重辰
長者の興よ脩我おけ 蕉
から指我若ふ下紙のうつおふ 足
笈よかそふる八百の 警 葉

森遠よ指紙三つ日わかをうある 路
なたり人我の方さのしくり 辰
それの秋をあるまちの悔も 足
猫ふらは猫雪晴れてうう 風
多辺堂小菊ふる女気みて 葉
我こめるをち紙去情を 言
遊よ経冊付て於ちくり 笑
亀さうう死を脊負ふさ波 蕉
大きさ〳〵勅よ遊してをひく 信
五日の風のこや雨れこや風 風
菓子雲も未こうれてを往こう 笑
長屋の赤面なり名ふうひ 足

熱田三歌仙

羽黒亭

行くらふーれたやうやうしき芭叶　芭蕉
あくまなくて蚰蜒なみゐる叩端
田家うる妙つの童のいろかれ　桐葉
乞衆よ有うた井の中通　蕉
月雪やる雪の夜相の不破関て　端
酒のむ猪のいうに供ーき　葉
双六のうらみ弦文よ玄そし　蕉
琴う瓜とーむ独れうつう香　端
髪下と侍従うむをめ表て　葉
野の宮れおしし岐まちの転　蕉
うう指よきなる帆弦うけ流　端
義者をとむる名月の実　葉
面白の拉女の秋の衣そうや　蕉
牝風をーめ、紅粉血　端

川涼ゆく磐を角よ結ふて　葉
舎利うる流よ魚日うつう人　蕉
かーこゆうる不か赤(とこ)花の死(ね)し　端
羽織よ酒我うつう揺　座　葉
ニうらうようて女よ蜑れうりうり　蕉
はうう扉風の恵よ洞くこ　端
字ふまーー笛のいろへ吐をうり　葉
三股のふね深川の衣　蕉
庵住やいうり杜律を味ひそ　端
花逝なる行こさの夢友　葉
いふうく有衣をいふ矢ご頁ふう　蕉
ろ没む小傍油いやかし　端
月明て手扱い山を立たつらん　葉
そこい衣盃の話うめむ　蕉

むら雨のそら紀於たゝ馬の背　端
ひるめ免の風冷ゝ　　青葉
ニウ
まこもる人い薄にとられて　蕉
男やもめの売そうれしよ　葉
風そゝ紀大年のお七すゝく　端
市門をたゝく生鯉の麥　蕉
常盤山を祭こゝ動ゝ志ゝて　葉
寝よのこる連歌所の松　端
熱田三歌仙
洗ゝしと援のそれの袖にちる　桐葉
ひとう茶枕摘む蔵の一家　芭蕉
百うけ山雑子の雛をたいくまて　叩端
清水をそゝ馬　柄杓の方　閑水
面ふを舞回よ熟麦る畔の上　東藤

七

宿のゝやけふ拾る紅拾る　蕉
ウ
鼻紙よ都の連ゝゝ七付て　蕉
暮る大津に三井の撞す　端
雪紅侘ふ漁の焼ゝ油をよ　山
麻より魚の四五百の空　葉
松風の餐よ柄紅香ゝし　水
佛を刻む西谷の　僧　藤
為羽玉の髪こそ女房にまて　端
意紅えやふる朝負の方　蕉
秋いおゝゝ味よ初浪ひゝう　葉
白ゝのをよわゝ雪の海　山
浪よとる緑の背ふ花楚て　藤
後ほを杖朝のかつゝ追追　端
ニヲ
笠打てかをそに立る痩男　蕉

五重の塔のほとりうつす雪　桂揖

鶺鴒の尾を蛤の囲に急ぎて　端

風よ多賀おくりの討死　葉

笈とりて北の廊下を引摸め　端

田舎おもりの物見こめたる　藤

うちつづく荒垣の雨ぬれつくし　揖

たゞれて名と柄ぞよりし　蕉

狼の神よ魁れよう野て　葉

おほん陣余の時なるべし　山

鞭頭のひゞきのもれ分兼く　藤

猿までの栗の行なやまくそ　端

二ウ

諍ひてまさ法師の秋ぞ寒　蕉

笑ひ合ふ名もうら山の尾乃琴　山

のこれおる家物焼て残る程に　藤

入日の跡ぬ至二ウ三ウ　葉

宮守ら油さけつもるふの奥　蕉

ほくしのぬを泊ろう西行　揖

同ろ

牡丹葉ふくら出ろ蜂のおろおそ

庵ふうりて

衣ころもいそぎ風ぬくろ乱

菜よ煤ろろふ

秋をへて蝶もふるやそく紙

をて冷ひ笑てらひろぬ

年のくれ

うて名人のおもひ人先の乱

貞享三年

元たる屑紙かうぞこぬく　蕉
けし咲てふさがれてもる垣根や　枳
葉ごみの風よ矢筈切りよ入　齋
かれそて下もみぢする孤屍角
あられ肩衣のくもる傘　鰭
石の擂鉢ころの坊ふさまそて白
われ三代の刀うり振治下
永禄い金之一くわの風化
近江の田植笑法よ耐人弦
とく起て宮詣よさんば重
松よ茶の湯の浦あれこ角
二ウ築まて人の娘ばかりつれて下
弥勒の堂よもひあめし枳
待宵の雁は塵たる文中蕉

友よよ櫓のおろす声化
雨さへそいやしかる節笠齋
門人奥手を放除の寺白
狸不二おろく武者笠落重
あら野く牧の所石撰よ角
鶏の一声夕日残月にのたらて鰭
乳の始安秋さむれふて下
いかたまの木のる秋死出白
泣れなさひしうて雁ばく枳
人おさひとり物おうれり揚水
さうりいさむ金山のほし弦
武岡の武仙弘名ある絵笠角
京よ汲そる醒井の水齋
玉川やかのく六の雨そ蕉

江湖しよ年ごにくり　化
外の花のこれ精(こま)もてゐる　重
升うこうせい蕉ことよふ　水
毛むく葛屋の畑のおそて　不ト
歌と碁枕す至のつまし　鱒
隙俤る猶(ナラ)の庵窓を打合せ　択
贅よ買るく秋のこころい　焦
麻の音城おいて人ゆつゐ　殺
ふる男の鼾をむ方ト
谷の雨たもと七里をめそん　下
伊勢は内の冬れ川つゝ　水
ゐ車糸つく音へからーして　角
梅ハさうりの陵くの雨千春
二月(キサラキ)の道菜人もそさ免すや　齋

姉ゆ川牛れおそ紅田れ新　重
狗あいぬ越の綿と識うて　蕉
れもひたつゝそ蓍の刈し　択
簑の糸城ふつらみぶせて鱒　鱒
ま魚ささ雨る山陰にーも　下
因人城ゆて休むる納方お　齋
萩さーも寸長うはれおひト
向ーは露と柔小名城付て　春
ムふこら森世ハ蝉のかつ　弦
三夜ふむよーおくはらう芳逃　化
あるーへまこの草の宿れ乱　下
ト傾城ゆそれおゆ人ル　鱒
往よみふらよゐれろし　重
升うる筆打よ加る筆て　白

梅さく苔小日ひろりく　齋
むく雨よるの灯ふれ消えぬ　峡水
乾くる秋の仲も静こうれ　化
行芳城家る月小朝日の有る処ト
捧そうよて掲　送ゝ秋下
信長の治まる代やまもらん　揚
居士とはるくかゝ忌の児　雛
紅よ牡丹千里の香城分て　春
雲をむ谷よ出る温気とす　峡
岩根ふく室紀地家城房に於　角
わゝ〳〵中三み月の若法ゆも　齋
遠ゆ遠ゝ芳紀や川水遠ゝて　化
笛陰城さまた青八位る　重
見事の唐山よ伯る洋ーさよ　揚

千声とゝ入る観音札所名　角
松いくつ涼そゝろうくの川待ひ　択
尾長ひまる松のもゝ琴　峡
麻むしろれ七月ひちる雲ト　
連庇くてる去そひさしき　白
二ツ橋

芭蕉
花咲て七日鶴ろる林藻ゝ哉
惜て娃のとゝる細　揚　清風
冬脇木枯去ゝと氷る谷て　華白
茶そ外枯そる笑の戸　曽良
名月を隣ハ麻なるまゝ　工齋
枝ゝろ〳〵れ相の柔枯る　其角
墨衣ふる〳〵いむーの売家て　風
内外の下向きのうろ　白

そてふさ付きの使いうらしたる　良
一夜のちさう袋うたけうる　蕉
松明よ新えんしの人ふい　雄角
生て拾るの水よ流るく　風
氷うちわれぬ敵を世に欲れ　良
こゝろ〳〵の錠ぬりし人山寺　齋
雪ぬるゝ指やさう〳〵ふまて　白
牡のそ〳〵めい月も白ひめき　角
去つてい温気ぬすむ方をゝ　蕉
三つれ麻の一つ矢ぬ負うし人　齋
勢〳〵と軍に急ある鉄をれ　嵐雪
男かう〳〵の白粉とぬる　風
撰琴に明の風狂ぬをれる　角
形ゝをそう〳〵牡丹ぎって　白

耳うとく蛛う告うる風ゝきゝ　蕉
たれかき灸法に菜ぬ焼て雪　良
札焼て刀はうい仏へきり　風
我うい麿ゝを厭の帥　拳　角
猶もちれ欺やさ〳〵詠そて　齋
糸の方夜い笛踊るうん　雪
おとれくおやむ人のひねり　白
眉ぬく油の蓼籠ぬつき　蕉
唐の書よめぬ我うちやりて　良
ひより買よ雪の山　通　齋
あゝれさいなゐ小指一破れ網　風
行やう〳〵おくて塩やゐ浦　蕉
相國の捷給ひ久ゝれと　松　角
車ぬおりて裏のやそ〳〵ひ　白

山さくら尾ふくものをふるう
古池や蛙とびこむ水の音

三日月日記

芭蕉

破風口小日記やよるくるをとみ
煮茶蠅避烟　素堂
合歓醒馬上　芭蕉
かさふる小田の水落をそり　素堂
月代見金氣　芭蕉
露繁漆玉滴　素堂
張旭のおかをふる酔の中　芭蕉
幢を左にとくるしら井　素堂
掣帚驅倫鼠　芭蕉

ふる郎都よ殆る市壺石　芭蕉
くろうぬ首かさる拓の振　素堂
乳をのむ孫よ行と爰ら　芭蕉
舟鵜風早浦　素堂
鐘一絶日高川　芭蕉
苅ろろ早苗の泥にをそ　芭蕉
倉ハすけめ牧を犬の乳　素堂
詫教三社本　芭蕉
韻使五車墳　素堂
花月丈山開　芭蕉
除戎扶にく老のうらひす　芭蕉
剪銀鮎一寸　素堂
箕面の滝やむと歟らん　芭蕉
新月うけ頭の秋をかくやし　芭蕉

風猿喉早乾

よくれつる桑のまぶちの秋立て　堂

内いそぐ雲の夕月　蕉

霧籬顔執與　堂

霰ノ浦目潜鳥　蕉

ゆくりなくて来る秋小鹿の声　堂

ともなれぬ振の珠数と服さし　蕉

山ノ仗山平地　堂

門ノ番門ノ小夫　ゝ

鷦鷯窺水鉢　蕉

雲よりもりてゐるをやけ　堂

奥そこの初秋の雲流れそそ　蕉

臨テ谷ノ伴ニ蛙饗ニ　堂

元禄中発

其袋

夕照

沽荷

晴嶺の望ばかりも西日哉　芭蕉

湖水こえふ芦の穂ぬけ　露沽

雪の外の雁を見こむる松ぞそ　荷

暫よどまる石あの雲　蕉

入月のうつる化粧ぢる瓜売り　荷

葉の覚よ笙をあやとる　露

山寺の庭も狐のさ風くて　荷

花茨来ゐと酒造るらし　蕉

仲の霞日ぐらかる鞠の音　露

白紅胡蝶の垣をゑ弦す　荷

指強残梁の拍子そろひて　蕉

乱ま一拳弦亜をかへさし　露

祖へ忌紀行の作こと青も生ス　荷
何も焼火よこれ亜一くり　蕉
捧の月一口の宮れ伝授て　露
淡つき深一表の裁うけ　荷
みくたくのおのう孫やいめむ　蕉
四十雀てて風も多ふーめ　嵐雪

森色山の月てよ事う
名て雨一ろう小ほ禁ぬる
根かちふ有る人をして深着
秋芳せーむてーろ志ハ
ら〳〵活浄の会ねうる
何くり
書よ森てすてろふなる月て却
暁のそいく時う

月こやし本す糸い雨ぬおう
雨よ森て行起こる月りれ　曽良
雪折〳〵人ぬやをむる月えふ

秋中そ

明日のや廿七夜も三日月
淀川八奥の中

来雲よ雪の袋や枝氏中

芳名

名大くみよなものこせ人雪丸け
年の市孫香雪よ出ろやれ
月雪このさけうそしふしのれ

百吉正比年

嵐雪
嵐雪のおろうる正月小袖
芳くれ

雑吟

すゝこのすゝこふゝくうみさせ
すゝこられい蒔花すゝ垣結うれ

元情

牡帳ようも海苔を売ふうも世
ふうれ日も暮うなゝねすゝ春れ
糸中やものまつの沢鳴を荘

物皆自得

花よねつ忙おうゝひをお雀
花の雲残い上野の浮叫こ

廿角う冊五七日

卯花も冊おさ苞をすさをし
笑にまる冊もうくすう郭公 其角

嵐雪の陰られて
新月を下るの雲おれく

名月も池をめうりて夜もすう

雨御別

猿泊よりをゝゝそよ
花よゝろゝろさゝんこおさ氏

時い秋うこの松こめし旅のつこと 露沾

雨をそねよ風雲の月 芭蕉
山陰よ刈田の新のふさらひて 沾蓮
民者追ほめし平川の水 其角
暮うふゝそれほうゝ紀撲要 露荷
おろさ夕雲に投歌く 松 沾荷
傘の絵松ゝくかう傾けて 芭蕉
ゝうむゝ神山の民 露荷
暑き日れ汗松悲む猿声 沾荷
そゝ戸の蕉りたる 沾蓮

りそ江五天のむう〜法もおく　其角
袈あるゆよ雅撞せ守　露荷
志をひつ練舎山に興深し　露沾
去ほる狭をよほよ風薬　芭蕉
月清くうき法へことの燥　沾蓬
害城法うして雑沼〜る　其角
花笑て人〜多る草の庵　露荷
額扱ひろよ山吹の指　沾荷
伝法浜やちらの映の春さそ　露沾
驚うりうこれる帰る道　沾徳
摘の茶に我文集を書終り　芭蕉
芽よゆるを、まあれさうつき　露荷
おうけい志のひ安紀る月晴て　沾荷
琴我なをる　秋の華　沾蓬

馬城下りて野孩ゆる杜鵑　沾荷
丸勝指さ尾上とるけ紀　露沾
風の音なう如蘇鉄のいろ迄く　沾蓬
大口をたる庭の雪　掃　芭蕉
雪もれく跡の雫うよ春さひ　露沾
ひとう篆城編〜うた妻　沾荷
一軸の取えの連歌掛よ亜　露荷
名城加ぬき城の戟ひ　露沾
面うけて発よむう一男つふ　沾蓬
みそ〜女のほるあ〜都み声　沾荷
雑織るえのふ〜えとのきう北て　芭蕉
柳一のうれをそこ〜る走　筆

句仕別
江戸さてこえうよう翁此も　濁子

薩埵のこおにこそえる月　芭蕉
貝ひろひくゝり旅ふまて　嵐雪
酔ふこゝろ人の肩にとうつく　其角
夕人のかへれいてねりや祇父亡　蕉
根おれ苗秋揮のなくて　子
沈の指うごかしはゞ拒ゆて　角
ゝれこゝ入帆のえもゆる　根祇　雪
世の中や畫こゝのうれる茶の烟　子
昧うかゝらの庵梅やしれ　蕉
死会こゝ俳の切のそうゝふ　雪
玄祇白ゝく国の翁　風　子
庫の雪のまにゝとお貴て　蕉
二夜とまりのはゝく　侍　雪
一巻の連歌ゝむはらに　子

昧カ

苗代をもる雨こゝろ　雪
譬の菓のいくつうれて　蕉
弥宜下りこいるまのゝ月　子
勾欄別
ゝろねゝ格とりせ雲夜の擣　嵐
一羽ゝろふ、千ゝ一鉢ゝゝ
拍るまよいふしおのみゝりて　曽良
田中の通の通ゝれり　依ゝ
月細くこゝ泉ゝるゝ馬　泥行
秋風のうる門のはゝゝ　水岸
家の糸務をとゝ桜の音　風泉
ゝふいえせゝ茶のきせ締　夕菊
猿まゝゝ安ゝゝの指ゝて　苔翠
此味うけ公かくれ時はの　筆

白雄句

附句しふ筆うつさんとされ　挙白
大燈の葉よ像ばかりたく人　芭蕉
松風よそれたる駒ぞ哀なる　渓石
崩をいくつも温泉のこれり　一笑
雀一つ三つよかうかあたの声　其角
蔦の縄見もゆるされしみ　卜尺
経よともいたる蛛の糸とみて　嵐雪
餅二つさし添ふる茅　白
吉原の出花よる見れば松売人　蕉
降ぬ一有て帰るとる宮　石

俤

手拭を男つきたや花ざかり　其角

續虚栗

十月十日餞芳賀

芭蕉

旅人と我名よばれん初しぐれ　由之
やさぶらひ人見ばかりぞ雪しぶく　其角
鶺鴒のこゑほと尖れたのまれ　狼風
狼ぞかたるふじの煙　杉風
かけおくれ生ける物のかなしさよ　文鱗
秋らし舞ふ舞ふ方に行もや　仙化
中の秋画工一ばれ帰るべし　魚児
鰡こうしてわたる渓　観水
秋垣や水にひく松波の谷　全峯
齢と共にわれ君ぞ松　嵐雪
酒のこにさそふ友の欲しくて　執筆
卯月の雪を掃るほくも　蕉

鰡たる袖たくそう早ほ川　之
蘿一面よのころ　梅　抗　角
乙ふうぬ里にきめ弦ゆ小沙　風
月よやふこん泊湖の竜人　鰡
菊菜とくく匂ひもおふうく　化
おもてぬこと弦颯人偃　偃　峰
途中ふたてる車れ簾弦巻て　蕉
沖こく私にそされーい雑　之
花もろよろのたく浪を珍ほ紀　雪
わっふて原弦っ乙琴れ　白
須の掌志そうほ空のかに入　水
萱のぬけめれ雪弦焼　家　化
老れ文の縄ふ人狂はなそふる　之
雲流されあとの雲守　蕉
里

白
傘弦むも水たそへつ　白
乗出てほ水たふん海のそ　雪
ねっね御寺弦たのむそ　水
蕪やろふむ板のほにーほれ　峰
小烟さひーを紫山ゆ仰ん　風
それ戸の馬弦酒債ぬさられ　蕉
たひえる里弦蛛にをーふる　白
筆の志めう面白れ小そそみ　化
幟こさして民の天王　角
卸牧野の笛吹ふう人童声　峰
傍くるいーく腰にさた扶　風
りえふーとろそれる昇を時て　角
課のまーれ蜀弦ふーへる　雪

水
花を求や雪居ぬ袋ふん
我よ出て海苔すゝこ採
蕉
谷汲き日うれ花の木間哉
白
声きゝれたるうれしみう
之

三河吉田驛

おを焚てゑ狩うう哉

吉田驛

鳴海本陣業言亭ゑやと
笈も弁慶ゑの君拾べそ
と詠てたまうなる松そ

京まてい陣さ中空や雪曇
ゑうゑきそくく氏海の月
ゑ
業言
知足
水鉢ふめとたやうく独ひうて
酒気さむれいうゝ哉一の風
加風
引捨し蒲団の裏とお拂
安信
僕いおくれて牛いそくなう
自笑
ゑうゑうる浦の鳥鳴ゑ
重屋
明日の命の飯ゑう立
信
わうゝ永我も鳴ゑ込えて
笑
殖いくゝ哉ゑう東う
蕉
ゑゑゑゑゑの後も一ゑび
足
ふうゑ哉そへて鄙の梅ゑ
言
髪ふる無のあうゝ哉ゑゑ
蕉
身よ痩出て秋の寒うし
風

殊勝なることたゞむ事哉　信
揚抜をこゝろ人の力あるそひ　足
小独して私の風をもいふ人　辰
こゝろ〳〵猫のる我捨こり　信
う紀年ばうてせもやこゝ　足
父のいくさを記かしの夜　蕉
松陰よをこゝろあり波の声　笑
翅とぬるゝ人鳥一ぱうひ　言
まつゝふる老い朝日さたそて　信
三夜ほしたる物のかいしけ　笑
山ぢら車よ削る木我ひ　蕉
姫ふりて岩我手うく　足
流は流よ行如法の朝嵐　風
孤うくるゝ苦れ草　笑

表

殿やれて力いむうしれ我ら　言
をうむ姫うこゝろもうひをを　蕉
ふたふりし揚のうつ生つける　辰
陳のかうをよ参我つるを　信
山文にようをうぬせる高れ柳　風
手我たをけかん明ら写ヶ　足
うれ盛り文我おつもう雲開て　言
卿炬こゝる和垣の梅　筆

ふら掛
　岩陰の淡い光こそ
　生ちい雪のうち日

里時の雪我ふとや鳴　潮　ふ
私とくのふる塗の埋火　安信
假山のふれよ梅と植うひて　自笑

なそよる猫ぬ玄に金庫に、　知足
警のうち我をも有れおかなる　糞言
居のこれこのみ也青丸風　加風
一里のそら母なる陸川上よ　重辰
狗ささめて門をそひこる　言
市よ出て志ハ仏仏ふれ　足
斗よ礼うみてをさそうて　信
秋日のそる守れう我つひき　風
有仏ほーたう標見の汚　蕉
たう細よ甲仏うけて秋の風　笑
おうう初そる宇治の指守　風
屠祇る西北谷のおれく　足
啄木多たく杉の古枝　信
笑笠よ金鍋の時仏志れう　辰

志ら辰とまていたくけし　足
幸螺うらの膏ふるる鳥水　風
角ある眉仏化粧をる衣　蕉
かうう雪のみと塗く帳の内　言
痛られぬ衣よ松あのうひ　風
罪ふくて配ホようこれくさん　信
鹿ふに濃ーホのつくもの　狗　足
式日の日いかと泊さてんせく　風
浅ふ茶の出る川　口　辰
探ト一順ふらふるるそ　蕉
笠拾あよ川笹大の乾　笑
そり有よ外里九姫の打通　足
すホかうひく前神ひく　蕉
朝雪にてきハ鳴の前ふん　辰

おうぐれかちらめくたしてて　笑
氏人の庄園多れ玉たり　言
井興衰もれのまちくまゝ　風
田をうへをあそうれ心の名を問て　信
うれこのみよ種をかそよ　筆
雪の花

熱田の社神時雨あうれい

庵迄を残も清し雪の花　芭蕉
石〳〵庭のともむきあうらよ　桐葉
明しの松笠(1)ある風やそて　〃
我蝶。帰る山のうけうひ　蕉
秋くれて角ある屋一ツ家　〃
枝よ雁ひし庵をひのめ　乗
机をくるいぬ袖を探しみ　〃

平五

こほろ〳〵贅の迹を別力　蕉
明うる待ぬをひ抜いあり　葉
被きし忠の境ちる庭　蕉
右畑よひとう生たる麦うて　葉
抱よ人声や雑るうるうん　蕉
松明よ飯あひり秋の風　葉
実もうみく表ある月　蕉
熱中家れきめくをぬある　葉
温泉いうそて人をきうれ　蕉
山塚の女いもの名にたれ　葉
たう注来城咲るはしそ　蕉
朝寒にくまれて住る雑れ声　〃
白うくしる坂れ糸つけ　葉
水酒る里の汗ふるまひて　蕉

あらしふきつむ野の分除　葉
ちの裏紫なくみて紀ゆり　蕉
物衣なはるふみこそうれ　葉
野そふて經積紙を重るかと　蕉
汐越を岩のうれあふれ　葉
おもうむねも似る魚をて　蕉
縣の聟のまう目なる　角　葉
あき山の伏猪牡若る声しよ　蕉
道一をち城刈ふる　萱　葉
優婆塞う肝扇つとむる文讀て　蕉
旅人記を救いのにきう　葉
奠菜にぬれ染いぬす雨の青　葉
水捕のはる悩牛そうふ紀、
西行の辞まあるねそされて　蕉

麦の秋よ鞆うりなう　葉
（伊良古崎の南の海の景そて望のはてそうふるふとかう）
旅の一つそうけてうれしいらこ時
杜国う居そて
されいうそこれこまよ　それその岩
鮫ふ
ひそうの氷ふそうるおそうれ　杜国
千ち掛
いうこ峠ようそうふ
旅のおそれをきそて
焼飯やいうこのそにこれん　加定
加さむうし我足の　添そ我
杖をぬくかよ思う子日して　越人
いほう鳥帽子の脱るう風　定

睡るやら馬の歩りぬおそろ　蕉
ろう紙こうく次おはろ扨の月　人
千句捌

寂照庵にて世紙百韻ありまして　荷今

くく高葉それと油も絞れ
旅寐のそとをそそるおこうこと　芭蕉
けさの月かるる小窓の話よ歟南て　知足
洞のねとうに野菊折るる　野水
千句捌

寂照庵よ梅盛しと　越人

窪炭やさった拾も思されす
雲なそてるす夜をうこの松　知足
海鼠のみ鯨をにくる貝吹て　芭蕉
脊戸より垂に編こいれ　垣人

今よせ人は名月扨なくおやこ　足
蕎麦の貢城通を窄る　蕉
冬囲扇

そ月扨若を知足亭小
酒りそ

ちつくしや高家めくろの若竹　如風
陽士の薪とよおる冬　梅　芭蕉
御車の志そくくとる雪掻て　安信
扨扨扨ようこれゆの月　重夜
矢中の声細もき萩の風　自笑
おくこのそく新宅の篠垣　知足
茶碗をのこころとおれ建て　業言
妻こおつけくひよこうる心　信
木綿機てぬ用よねしる　風
ぜそん佛のそ日ちつほく　足

さゝ雲なりて故郷の山もと　笑
放てる鶏の啼こゑも見ゆ　蕉
ゑひ藤枝を冬ゆる事なくて　信
燈けゝ凪の軒よりもる月　辰
秋やむうこゝにかたる客もあり　足
ふとしまろ〻〻ものつゆ　風
芭蕉とて葺てもうれしき　信
痩そろるのまゝふつふうる　辰
栗うつよそなる朝うすき　蕉
ふのうらひをたく菜つと　信
我名ハ峯越ゆるこゑ松風　風
うき名をせむるさゝ波の音　笑
〻〻のこと小の揃の添ふしに　足
琵琶よおれ我恙の鼓のこゑ　言

色白に有髪の僧のころも着て　蕉
夢に似うる岩もくみあけ　辰
抱り帰代のほどのうねひと　言
ゆくえなき仔勢の淡井　蕉
見めぐるまでる月ぬけ行く　辰
紅屋よやゝあつき竜のまつ虫　信
旬〻とて秣に梶なる菜うて　蕉
母のいのちをれもふこれ　辰
羊吼るその曉のおさらし　笑
外山の花れやうと養ふさく　足
日い永く雨のそゝた名ふて　信
厂の名残をほひくれのく　言

師走十日　熱田古屋にて

いらんそ

旅寐ーてそーや除ゝそ排

拔突板ゝそゝろう落う

歩の行あゝ拔つゝ板ゝ房馬扑

ぬる雪や孫の跡なく年ゆ暮

貞享五年 ゝ孫改元

元日森ゝそれゝまい

二日ゝもぬうハせーれ花の雲

風麦芽二句

夫ゝてすゝ九日の朝山うれ

あこくそのふいーーらゝ梅の景

山家ようふーらゝて岸のうう

ふたくものあうゝてあーなゝ

香ゝ匂へうにゐる窓の梅花

れ芝やまゝ陽炎の一二寸

行脚の在郷夫仏る膳旧

夫ゝ日陽炎ゝ両ー石ゝ

悼此子の即座ゝ

仏ましのことれのひ出す掬ぶ

いせゝて

神垣やれもひもけすねゝ像

神垣のうう小梅一木も乳

ゝ良飯のうゝる一木うう

即ゐるゐの一のとゆのし梅花

笑ゝた次拔の中う初ゝら

景清も花ゝの死まれゝゝ婚

翁竹菴

花ゝ名かはーりゐや廿日狂

代往弘花を礼うえりて
いうて吟うて笑を一揃
まる我とめる童よりり
道の伏くる人とうう
万葉丸と名のる百生の
ハつれおかなれうに
乾坤無住内行二人
丹波市
草叫て有るところやふちの花
初秋
美のおや気の人ゆう堂の隅

足話とく僧もこえり花の雨　五葉
秋晴
雲雀うう〳〵ようとう〳〵晴ず
よー晴
花ちり山の日比の朝ろけ
出ハくくれ花のう〳〵ある寺坊
苔清水
走雨の木下ふつこんつく寺
西河流
本うくと山吹ちる流の音
うくる
狂ここ花まあけ神の気
高野
父母のとうとうたこー経る雪

こくる花にこふさ吹く夏の陰

和欽浦

汗衣ふるひつめてすゝしろふ夜の衣こゝろみ出て布子着そへ衣こゝ

奈良

薩佛の日ふうすれば涼みかな

須磨

涼みよと雲の矢そろく吹ける

時渡そんこゝろ

蝸牛角ふうとみよ涼ケ岡石

吹石松伯

悟らんやそこれ蚤と蚊と蚋

湖舟

五月雨はかられめものやせこけ梅

よのうこゝろれ〳〵清る雫哉 素

長良川賀氏水樓

おきん小袖もいやや土用ぼし

針あらう間にゆるむ綻

秋の月

松もろくてやって此ごろ秋寒

鶏のつゝ小舟こぼしてさゝ

声あらい鮎もいらんくる舟

何事のこゝろてふも似すこの夜

七月廿日竹葉軒会ニ　　芭蕉

栗稗に豆こそまじれ粟の飯　　其角
粟の中よりえぞ青き　林　長虹
秋の雨ぞ物うき窓の苔かけて　荷兮
角ふえ遠く成ゆく山あひ　一井
ひたるまで人のやいひるさよ　越人
菜おようでて屋根をおほふ　胡及
木の葉ちる枝のさびしき神垣や　風禅
待うぬる時の答もの　蕉
延ながて蚊の声よ眠られず　虹
これよ狩人や妻をとろへ　兮
ふたけをそそる誓ひ給へれ　井
死てゐもかまはぬ恋する人　人
乞食のたゝれ出る秋の暮　及

義仲くむとて涙次に禅
史ふるして咽るをのこ行末を　蕉
旨きたもとのえもいはぬ匂ひ　井
雨乞ひをやしに花のうばひ合　兮
外結ぶよふる影の連ぎり　虹
日和さよふく乳おのおしく　兮
木馬走してゐるも哀なり　及
名ばかりつゝみてかこちかり　弾
初篭おろす汁凄れ夕れ　井
さゝやきの香うそる有気人　人
人一代の忘れ草よ　秋　蕉
捨し世ことの恨も引むしも　虹
きたなくなれを恥も泣れ人　人
懐よ服をさしてまよ出る　及

下戸をふくめる雪のおの真弓
早咲の梅を我矛(イニたてたこたち)たてたる蕉
隊せぬむをめ眉かいてゐる彈
志のひるよもろくれる垣根哭反
踏ことやさせるおのこ一犬人
ゐやをねおを開そをう振立て弓
行なゐりはそまをやら蕉
花よる双の蓋小抱ゐぬ彈
簑そう出をそるのタくれ虹

ちらしれのかうんとゐれかく
こころいてこをかうこむく
朝ふかい酒もり志ら矢雪ま
送つれつおそうつそい木雪蛾

十

文料の月い二人よそくれろう荷弓
撰中令ねうむ芳ろつく
雪それて拾い月もさされす蟹人

蛙狂山
傍や姥ひろう注月の支
ちつーれやこ秋の月こを郎

善光寺
月みや四門四宗もたく一
十六夜もやこそ文料の秋ろ
吹とはすろい傍雪れ社名歌

曠野
泳川の秋
月うねもちつつたまかかも

蛙人

酒志ひるふ人此比の　月　芭蕉
葵をの陰を窮窟よ雲つん　人
理をとゝのおれたる秋のうき
瓢箪の大さ五石はるゝ　人
風よ吹をてゐる市人　蕉
おもふも長安いとゞ名利の地　人
遠のきさとを目ふるはし哉　人
いそ〳〵と昨をのそれを出て　蕉
ひとり世話やく寺の坊そう　人
此里ふ古き玄蕃此名物へ　蕉
定家をつせめるのうけはの　人
きぬしやうかなをあやふく　蕉
風ひき給ふ事のうたゝし　人
まもつる座の此指もとうきあ　蕉

7

ものいそ〳〵さ乾魚洛こゝろ　人
月と花比良の高根をふるして　蕉
雲荘さへほるところの孤松　人
破芭戸の打うち付る雪の末　蕉
えせい淋しき麦の挽割　蕉
家おくて服紗ようむ十すき　人
おれをひ居る神主のおいひ　蕉
人まうていやさ法花の匂ひる　人
初茄子乾る堂のこうさ　鳧　蕉
ほゝゝき次嵐のたゝ吉中　人
恒穂のさゝけおいこなれて　蕉
あやふくれ坊主味うかるめ　人
行のをいい誰う用作むそ　蕉
行方れうそのをまて清さゝ　人

きぬさもきく　蕉人　居眠
秋の田刈うせぬる雲岩うて
さいしなうく文字同に来る　蕉
いちやくく尾底の木葉原　人
発をそるの痩てかひる　蕉
花のころ淡雲ありもうらゝ　人
田ふ〻を捨て腥さゝ　蕉
杜曙

苔翠亭

白雲行光海さん渡来れ　蕉人
新夕うふ紫幡のひよん　苔翠
此君と名ばつゝ升れ家居て
さり行うふのイロハおひよ　友古
あうち声よ雨もつほうく　夕菊

なもれをのそく山の芋刈　湛若　依々
おくたく雁のうけれ淋しそ
女房もこれい留主うたゝ　人
鐸とおろうそうをる垂れ友　古
癌おさえてあうれ花　注　蕉
もうと止ぬ雪の戸明て帰る　翠
さし砂ーたる曲輪の章　菊
秋風やお祇おる多の表より　人
谷の底のにうくしうれ月　依
打丁よ注まて一羽飛うう　菊
神よ恥ぢる敷盛の塚　若
庵人の跡巾に花の笠うを　菊
降みて牛よう落る雲風　蕉

鹿島紀行

白菜はうら紅粉花そろ〳〵や　杉風
泥うつたる稲を干ひる祝　越人

月雪日海もおもふ旅寐して　芭蕉
玉ゐをむすぶ苔莚
おつそうとわてそうれ雲丹牛　友五
そう陶ゐおろう帰たそねる　夕菊
御内そ念仏申とゐをれ　依々
筏（いかだ）をそり汲の海苔うり　泥芹
たゑ書の大ふおとそうそ来うる人
鬼ひそう小柳れる　月風
盃を門ふ人とうりて　翠
そう〳〵夏たる名西の貝　五
香のふゐの個ふやそうん　依
小舳ゐれ出る雲雀のかゐれ　風

後後の汤注ハ雪（ユキ）踊上る人そう柘　人
笑一いその孫ゐ睡　をて蕉
里をひ花の本信ふそうふ焼　五
たいそう〳〵妹のあそ盃ゐ入　菊

鄙懐紙

左抑亭

芭蕉

そやく〳〵笑け九日も近し菊ぬ　左柳
そ〳〵ろうれたり青月の秋　路通
新畠を年ぬそうそ〳〵（イニカ）立て　文鳥
そそうそうしそと山のそそれり　越人
酒呑の癖ゐ陸ゐ伐ゐたろる　加行
ふおおろ一そ〳〵ゐ文を打いを　荊口
笠の裏おて眠り伐をゐめり　此筋
年伐間をてふを酒被うめ

武人の書にんやらぬら傘　木綿
けつ雛よ精をとするく　残香
どっこ〳〵て矣とる死このうち生　曽記
書物の内の出こらひ　杖　斜幕
飽果〳〵孫もけころ悪〳〵そ　柳
歯ぬけとかをい貝も吹れを　蕉
方をく阪巾ひりてかふるく　鳥
あっ紀こる夜の分別口
一棒よおつうる山れ飽咲て　通
陰をらひこむ去れ藤味噌人
萬家のとくはりいいひく　困
材そつれまて夫よ追ぬく　嶺
俳宮く竹御の方のおもしろき　筋
二代上をの磐ハふうりくり　香

揚うの立するはとむつ紀　良
鳥帽子かくらぬ根も流くて　行
冬くもつものえての大雪よ　柳
茶のたてやうも不葉内ふる　鳥
美〳〵く良生れつくおうさよ　人
尼よ朱へき青のきぬし　通
方紙よ具足とやら紙透(イシをうて)して　蕉
萩とそれもふ一様の　萩(イニ萩)　口
何事も盆我仕舞山てはぬ　筋
追よも連ふさそふ茶宮　良
丸腰よ拾て帰りこうし紀　香
もの〳〵紙〳〵る母の尊とき　困
花の陰猿会屋の豆まく　行
梅山吹よのこうにさうる　嶺

十二夜

木曽のやせもやうさなほらぬ后の方　芭蕉
行秋や文ふひきやうふ三布ふとん
所令後や油のやうか酒五升
いとこみて雪えにこふ雫そ
冬ごもりまさきのつなの長き夜
木曽の谷

生ひそうでつふ折るなるこれ　芭蕉
ほととぎす小ぬか寒そ茶の煙　仙水
代官のかさをにそめの力とそ　蕉
居風炉捕の鍋を入なきり
酢の糟(カス)汝を思ひ切りとり　水
くふも狂人てくる次相談

裏

親の時とやうく医者ゐ花　蕉
死おくれけるこれ妹ぬくもり　水
香着れからとともるお前　蕉
振こうおもあたる白粥　水
ひさ衣汝馬ふも名をる春の容　蕉
中稲の荒き松くる風年　水
ともかもまくて洗て方法く　杉風
ほくねて玉し河の雪ふけき　水
俤らまて村汝まく寺の酒　風
とけてあとれふ張き疱瘡　水
初花の沙汰なき春いを紙て　風
伊賀路のくこれ山の裏る　水

註掛集

雪やちくを笠の下ふる夜中まて　杉風

刀の柄よ氷るをぬくひ　芭蕉
唐からしまおうと彩る年うれ　俤水
秋までよる涸盖の蝿　依々
朝しい布子ぬとる寄屑　曽良
屏として拾る腰の下　杉風
島守よこ葉の礼と深く　俤
あうらむ麦いるの洞う　野坡
包うしめ指い寺の林まて　杉
髪伐切ても分を作り々り　俤
焼うとる物えのむしろ押まう　蕉
貰ひよせしも茶に合ぬ水　良
藪こえた泳よう紅たつ霜柱　杉
出家よ抱ぬ引上る　こ坡
む局のいくねちなる郷ぬ方　良

取り竹の湯のさめてけそ　依
そつ花い蓮掏よういそれて　野
堀の釣ま木にくひとの吗　孤蓑
道人よあつこ衣もるとうぬれ
元禄二年
元は小田毎の日こそ忘しぬ

伊達衣　出羽五歌仙
陽炎の我肩ふたつ寄まこれ　こ衣
水おこふをりり　を　曽良
払う屋よ猫活のあえ地洗て　嵩山
牙いうそめよ猿の腰掛　此筋
いさひも同し名ぶに頃々　良

くろ弘かくれお愛の秋　蕉
萩原や露ぬれても面白い　筋
晒ふり拂ふ供の松明山　良
五月雨や小袖の綿も取る手　蕉
荷たる髪弘と引掃へ　良
忘れてこそ人なりもおもし　山
ほそく書る文の優れ　筋
盃をそこに火燵くもそて　良
年寄ひくり日待つとむる　蕉
もたくまるも夏ふりとこゝろ　嵐蘭
相のとうたつ具足の家　山
旅車ゆるひろ〳〵と月と花　良
浪ハこうすその不二を動うし　蘭
客よひて汐干なうれしき鮭　蕉

大よ追〳〵あちの山〳〵　良
城北のそつ雪晴る蓑ぬいて　山
記て火弘吹く種つ弘う妻　蕉
りこう迷ひよる望月夜　蘭
くんて持うせい麻苧こう　山
山風よこひ〳〵荷る栗のいが　良
黒木ふとくる谷底のふ屋　北鯤
たう姓と身をやはらぢんお恥　蕉
あ〳〵みの百合よ洞みつ　蘭
狼の良そて吼るふ川の月　嵐竹
水の出屋よ佛供うて　山
麦ふた振坊の温泉の熱ふ　蕉
たひ祢とひたる関のうち物　良
何ゆ多人の延者と分弘下て　蘭

膳よ居れと朝の淡燈山

一門の茶ごころもの動かぬ鯉

イニてくりる茶のそうそなし

蒸籠つくる拾政の筋竹

未来記

草巷に拙さくらや草庵餅　其角

両のよよ拙ささくらや草庵餅　其角

春よ訓一膳るの児　嵐雪

野屋敷の大縄もゆる伽哉　其角

山のあるされ雑せもあり　蕉

傍輩に相撲のお名ばかり　蕉

帯ほころびを全れたしまを　雪

麻ちさく初雪りの南無妙　角

豆腐仕舞ふ宵こそれ東風　蕉

酒さます拙よかはそ紀香花　雪

剃やと男ふ老の紅裏　角

屓軍功者にひてゐるり　蕉

ふらひ雪る雪の明方　雪

見ちして故屓一這今月の友　角

巷の雑ろと啜る小雄康　蕉

一通り彼岸の花の咲もろて　雪

日永よりくる浴や太春　角

おろおよ綿よ名ちん弱法師　雪

沖医者中ちん伽ふろく　蕉

経ふ浪ふりしと返ととし　角

提灯えゐる町のいそに　雪

女房ふ未屓の亭ちちやさて　蕉

高田の堂花ともしく　角
夏ごろも軍の孫へぬきをかし　雪
たしふれ風の石蔦へまろ　蕉
生のみ牛よせうる市半　角
江湖披露の田舎六ど　雪
とりうと扨よ角羽絞よ　蕉
いたくとまうと時のわらん　雪
糊たちた四手打菊のく衣　角
どんどとのひる男足半　蕉
一夜ハ江戸城そさかる小高ひ　雪
みたらし汲んで井の門前　蕉
栄へよとまま女抱し花の傘　角
三人こらふまれ月うし　雪

菓子分四よ茶ま人形やり武花　其角
梅の日や悔ハ笑人おわらひ　嵐雪
杉風ふお並ふる
章の戸も住うるおと雅哉
　翁
松一まや名にとあられぬまま橋　沾徳
松しまやおろけ小二人まま乞人　素堂
千よまて
りまやまら鳥奥の眼いまこと
日光山
あらたうと青葉つつじ日の光
柳をてくろ笠ふま衣うく　曽良
鄭ろうしまれ流のうしおて

出羽五新仏

雪丸け

奈須雲拾亭

秣負ふ人を枝折の夕暮れ　芭蕉
有明淋き雪見に出る straw 堆の茶　翠桃
むら雨に市のかり屋根吹たて　曽良
町の中ゆく川音の秋　蕉
(二)雪のふみ分ん所もなき寂　桃
秋草絵に書く惟喬のいたつき　良
(二)業平忌日ニ当ル
ものへ行に扉ほそ押明て　蕉
(二)ものへ行に扉ほそ押明て
くゝられた髪のつゝ元結ひ合　想輪
尋るに犬猫捨る家もほ　良
盗人こゝろ二十六の里　桃
松の根よ笈なをしへて年ゆく　蕉
雪うきふて連ゐ始る　桃

(二)名所の
籬越そわび住の野の炭俵　湍
張ゝゝゝゝ花たちの家　良
あれ方も庭中ゆふ立ゝゝ遊ぶ　桃
蕨ゝゝゝゝこゝん胸のつゝれよ　蕉
(二)タイ
綿蒲の時めく花の憎うし　良
れのこの羽よふふる蝶の羣　桃
日傘さゝるゝゝ持ゝゝ　湍
衣裁をてかろ元世の中　桃里
酒のめ谷れ杉木も佛之　蕉
杓人こゝろ阻の松明　良
(二)落葉者の翌の同杵松　桃
(二)ことくゝれを注のゝ
森の透方にゝゝ木の汗元　湍
月中の種つく(二)ゝゝゝゝ　里
一登の茶(二)ゝゝゝゝ元ゝゝ　良

先食とも走りて浮世の相手 蝙
洞の地形よこもるあり明 桃
苔のまい猿の泪やぬるん 蕉
(二字ヲ墨ニテ消ス)流人栄苅る秋風れ青里
ゆく月もまた朝日ねむの性 蕉
茅ぶきちらす流の白浪二す
発のまれ雲うとうとして動り 良
奥の風雅ねよさつく 蝙
ぬぐひ折紙花小笛置て 秋鴉
弥生ころなる去の海月 里

書ちの奥に俳頂表尚の

山居の位ある堅撲の五尺ゑ
ねらぬまのこはむそもく

一雨なくうせいとす
えたるひしをもあれハ
木咏も菴にやふらん夏木立
るのにくれ白ゆられて
壁越よるひさ向よ数る
ほの仮ふれ物そ
岡一村うるてうてう柳うる
白川寒
和花分うさした寒のそれ郭 曽良

袋表紙
芭蕉翁真蹟 伊賀市蔵
風流のはしめやおくれ田植うた 芭蕉
表紙裏ニ貼付ケ有リ 等窮

水せて百姓のなや悪らん　曽良
蛩よ蚯蚓の声聞をるう　蕉
一ふしてわが小袂れよ川柳　窮
旧雁よ座根ふく村を秋なる　良
舩の女う上弦会仁に落を渡て　蕉
世ばたのしやとそもふ舩　窮
或時ハ憚るも袁の入ぬん　良
撞の小枝よ点灯蔭てく　蕉
うらそていぬう畑の名ふく　窮
霧ふるふやら白髪おもうけ　良
酒盗い軍ば送る関よまて　蕉
秋をしる牙とおもしし得　窮
よる歌の巫つき破る麻の角　良
禹の肝伽の注ふせる月　蕉

いろしのいのう狐花に窮みて　窮
かふしよふ狐にふく糸杜　良
ふるれ尾よれく年やむ入　蕉
せう振そう清水冷る　窮
最ひく雪舟一をちれ伝わて　良
れの〳〵武士のみそのう宿　蕉
箕こ〳〵ぬ抜少〳〵点の世に会　窮
宮よるをしうれる酌し　良
ま抱よ細れ肱をさしへて　蕉
行やう車のたらめ七夕　窮
住う〳〵る宿れそうれ方狐そ　良
そくれあうらむ六条う髪　蕉
初忠をみ技うる片て撰狐　窮
太山にくえの声をふくそ　良

隣ーさや湯もこもさくみな　蕉
殺生石のトはしーろう　窮
花をれるれ折り祇導ねて　良
酒のはうひの醒るそる風　蕉
六十の後ろそんの睦月かれ　窮
蚕飼をろ家小油重ぬる　良

伊達衣

来門可伸い栗のまうけに名祇
ひそろ栗とらふそ西の木
とそて西方浄土ねうと行基
菩薩の一生おそまも拾本祇用ひ
うふとうや

かくれ家やほたぬ花祇彩の栗　栗齋
よれよほさろれとねる女卅　等窮
切り崩を山の井のろい有そて　曽良
畔伐ひをろ石め　掛　掏

ねるそ志栗と用とそのこれ
秋志ろう月の綾風それまを　等雲
あつさろ矢叶羽の矧祇教せて　須等
矧玄祇讀る暁の　声　蕉　素蘭
牡蠣桑よ吹よりなる叶言　齋　窮
酒の遠狼祇ふこそろふし　窮
聲八い准よ多てもそつーに　良
されて送もる領様の糸　雲
貴さ祇神ようもる拾さよ　等
月のひつこ祇ふこそる　蘭
狗ーてお魚狗うかねーる流る　窮
笠の猪祇する声れろう　柏　齋
梅よ出て初風や芳れい志の時　蕉
かとろる谷の祇数をろ　良

あるかしに来ぬきてそうを　蘭
ふる雨るされぬ思餐そうれ　窮
時と雛ねてそる事のえへれ　竿
かくへ琴の脇やれもたき　蕉
うたく痛の姿さうそ(イニちなし)神在れさは　齋
朴をかたる市の生酔　窮
行僧に三社の能城いくれて　良
素会祢てもの二つの後　蘭
伽よある峠駕の餅をきてひ　窮
四五日有ねてそう蓑のを　齋
ろ一付てうひふと雪れむ(イニ文字をそうくれふ)柱　雲
廉の音経て望うせぬ村　良
冠とも活をそうに注意れ　蕉
うけ(イニ文字をそうくれふ)こうはうく文祇と　窮

志のふの里ふるふの物ろて　蘭
早苗とうくもとやむし参拾　齋
佐衣庵可旧社のうて　雲
源家の什お祇拝す　良
気もちも五月にうれ馬機　蕉
望を出のを能神へをのー　窮
くてやうう
望を出いつこうこのやうを　蘭
民隆のねうせやうせ迄指と　齋

揚よう松いこ一本と三月こし

松意

松一中や鶴よ羽拡うれ秋こ　曽良

ろ雛

夜ぞや兵ろう美のあ〳〵

卯花よ兼房ろ白もの　曽良

五月雨のふうのこーてや芝堂

尿前寒

巻虱るの尿ろ牧もと

尾花沢清風亭

そそ〳〵家ろ書うーてねまる

這出ようひやう子の墓のうろ

まうこれを伊うーてあの元

立歌仙

雪丸け　風流

即たつ〇の我宿せーやれ橋

そーめてかとる風の業もの　芭蕉

案俵り秋よ為を折そへて　桐

雪をかく波虹のもとをろ　等

そそろおる方に二十里陽ろ　柳風

馬市業れて羽むへせん　華

雛気たる父うろ文伐ろ仕へ　蕉

幸こゝろうて判ずることむる　流
梅さうれ三寸もやとして唐瓶子　良
をたま城上ケて通を　燕　如柳
三歌さえるえる故に思れて　木端
涛の音さく〳〵岳の墓原　風
雪ふつゝめまいおのれふりかゝる　柳
莢端〳〵る猫のたま　蕉
かけろ〳〵を曳るをおもれ石　良
たの〳〵と茶な挽せるえ　流
景ふさゝ悪よかろ紀さうやき　雅
油香炉ふつゝ糸(イニ)まえて　風

うぐひすを笠に縫ふ旅寝かな　宿良

雪丸け

五歌仙

大石田高野平左衛門亭　芭蕉

五月雨を集めて早し最上川　芭蕉

岩よ雲城つゝく杤　杭一　栄

瓜畑いさゝか土のうるほひて　雨良

里をむら〳〵麦の細道　川水

牛の子にくろ〳〵と夕立来　栄

雨を重〳〵懐の岑　芭蕉

傾城に恋せよと山ほとゝぎす　水

松むしをしおく〳〵岡の境　目良

永楽のふるき寺領戴て　芭蕉

妻と会をる大竈の低　栄

姓名の香に名おふことなかれ　良

瓜に爪うつる双子の石　水

捲上るをくれよ児の竹馬　栄

おつくふ人よ告る秋風　蕉

永劫の井戸月てる氷水　水

きめこまやかにそゝぐ出さそ　良

花の陰忘我識らざる花遊　栄

緑そんいとふむ山陰の塔　水

物多村に深芝刈の老爺て　蕉

刀うつる甲斐の一乱　良

むら〳〵垣人も通らぬ寒ふし　水

名をの立たひよ削る松木　栄

星祭る契に拵ふて　良

集よ遊女の名紙とむ月　蕉

扇面ふるうてたれし奎を筑　栄

栗責よ出て家路そとそ　水
合　歌吹　本陸と名付けらるゝ　蕉
たえ〳〵つらなる日も秋良
古々のあらし添ふこゝろ　水
云葉汤をるみの糸　合　栄
雪ふれ降そ市の名物と　蕉
燒掃の日数多の座の　客　蕉
ふる人をたき懐紙かさねられ　栄
やもり鳥のやうに入　捐　水
車ひく子の日小盛てを更　乾　蕉
山田の種をいくそともつ雨　良

花摘

六月四日羽黒山本坊ふいて興行

有ふとや宮ぬかをとす風の音　芭蕉

行ゝ人のむすめ夏草　呂丸
川舟の綱よ蛍ひき引て　曽良
鞆のあもとよそもろこし方　鈍雲
泥水よ天もうつろ秋の雲　珠妙
きたも南も治うちくもり　梨水
ねうてゝ雪も降そうき秋て　雪
百里の旅を終るの半迄　蕉
山ぶしこゝろに旅の記をそん　丸
斧持をくむ神木の森　良
雲ようこの辺ふしひ名取て　雪
至うこぬ教へ行とれく鬼　丸
古町所とうたなうる接客　蕉
糸よ立投よう〳〵荻　水
有てよとり記されて愧ぬ　良

ひつそりと山城さびの初茄子
蟬よ車の音なき井戸
絡機の音いそがしく投扇
閑古鳥生の未の二日
我家よ雪かつぎたる梅の花
鉦叩坂蜜と付しうつせみ
山の端よりそそり帆かけ舟
蘂ふるき墨いろとなりぬ
栗稗秋日毎の飯小食飽て
うれしうて秋折るわれ戸
あら捉我毋の記念ぶ拙なれ
雀よのこる小田の苅そめ
我秋も門の松たて一歩
徹兎よそれて指さす方

さぬしいかふ寺籠
名の女郎花
婿入の花見る馬にうち乗て
もとの廓い畑よ焼ける
金銀のまもし一歩小改り
奈良の都よ豆腐初る
我雲よそだつまで金掛て
疱瘡巻ふうの化粧うし
遠けさい月我注意を祝業松
ふるしに女我くさせて
千日の竜我ひとり小松原
鍋牛の売を踏ふ汲音
身い城のにふうとふ笑
こけてあけさ女郎おう

良 丸 良 行 丸 蕉 丸 良 蕉 行 丸 蕉 行

ゆく月や有磯の海に入て　良
温泉かそふる陸奥の秋風　蕉
初雁のはつかにみえし氷の梯し　丸
ふる郷能る宮の青うへ　良
あま衣男にまさるこころよて　行
灯かすかなる夜のつきを掲　丸
花の時雪とやらいふばかる　蕉
数よくりしきれみひこ　良
おつくみ

出羽酒田伊東不玉亭　芭蕉

あたみやや吹浦うみてタ涼を
海おころ放まくむ帆遥　不玉
月出ん寒巫女かちん潤しもて　曽良
民の竈のけふる秋　風　蕉

走

出るより手て掘かやりなる芋掬　玉
あらまの玉ねぎ入る養の毛　良
名所能る鶏卵の有れ冬ごもて　蕉
火ばち焚くく新よ向聚楽て　玉
海道八百もふたまて切せとも　良
松笠れくる武隈の土産　蕉
草枕おうーれ急も仕るひて　玉
ちょうこの外よ行るかひと　良
乳供して南かこ我も出ちん　蕉
此世れまもるよう一時ふ入　玉
朝つとる妻子等もれ後の声　良
久しも命と語のこ食　蕉
かくろう花一家かと茶筅初て　玉
れはろれ鶏の霞ふの月　良

それいへる木魂よそくうたの風　蕉
をうとへ流ふさもろ山　雅　玉
到力うけつゝよにきたる笹伝ひ　良
指おさむる塚の　荒　玉
そのまゝよりおさ出ん　蕉
あはせす衣ぬ経くそふく　良
明日ふらん雁ぬ俵よ生垂て　玉
月さへ凄き陳中の市　蕉
庁舎いさ高の奥にこゝへ入　良
小袖袴を送る戒の　師　玉
家良の母ふ仇たるとゞしてそ　蕉
変にいそしぬ家いれとも　良
家良の京物つさへたる古今集　玉
花よ封切る坊っ酒　蕉

営む巣ぬをむる羽音ひ　成
蚕種動きて事まれ取　玉
にしれ木ぬ仇りてぬる花ぬそん　蕉
こゝふきを城このむ宮造　良

雪丸け

六月十五日寺嶋亮参事

をしさや海よりなる三上川　芭蕉

有名ゆうふ沢浪の浮海雲　令道
黒鴨の起りく庭の宮的て　不玉
葉ハ雨よふらんこゝきれ　定連
花とちれ折安倍て市ぬ待　曽良
新よ陽こそ育れあつ大　任暁
不機嫌のこゝろにそ起　衣　扇風

糸浪や雨も西施うれしの花
　　沾徳
沾徳や鶴拉ぬきて海すゞし
糸浪や料阿行うし神ぁふ　曽良
海士うれやゝ松を分てう糸　低耳
　　ここの巣ぶんそ
沾こゝぬ撃つ行きてやみさ蟬　曽良
荒海や佐渡よ横たふ天の川

亜江漾ふそ

文月や六日もつねの朝の如す　翼
露ぶの世たる杓の一葉　左柳
納涼よ飯焚くうつまきて曽良
蚤の小糞のそせ上る　眠鴎
かゝこと等むうよ山ぶえせ　此竹

松のろよ行く供　雉　布藁
夕うし座ぶそうろ石雪　菜
かゝひ云を絡うれ　水筆
おそひうみぬ負ぶ作うを一つ　栗
きぬしの楊弦記も亜うし　良
教しのうゝみぶ品の指つて　義年
猿よふ住る我うひ　白　蕉
物これを菊を有れる為ぶ　衆
庵引て来る犬のふくさよ　雪
座うつをそ知らぬ妻　衣　鴎
なりと武人の山々の菴　栗
花の冷　其ふうれて星なそよ　生
蝶の羽をしむ桶焔のうけ　雪
春雨ハ蚤判る児のろこかも　蕉

香ハいろ〳〵に人〳〵の文　良

日　右雨

星今宵作ル詞幸てこゝろ〳〵

ろ考へ〳〵き初刈の稲曽良

瀑水通ふいそく布にさて芭蕉

（号十三るか一）

挌拙て小枝よ花の名ゆ号し　也

乃のにつゝの日ハ長宗ふり　良

糞ゆ宮雪車もわらし子雪の上　蕉

一むら鳥人ふまて　子雪

金山や佗て小砂ゆ拾ふん　右

科のむら〳〵ゆ鴉の座　也

うゑてこの石首ゆ魚の名とゝまて　蕉

人いそう〳〵ゆ年ゆ暮ふれ　良

松かーい荒てうしの音ゆ雪

子ゆ射させる拙の床蕉

砕け老の狄ゆめ覚ゆ右

往昔の有ゐま向たし也

接皮むく老のかーらゆ秋そ〃蕉

附ふまて家ゆこそ半歌雪

垣淡の孤村のくらそ入也

活ありかふれまゆ〳〵き右

かふゆし〳〵花の孫こそて曽

笈ゆおろせる里の物座雪

俗情ゆるつゝて花のこゝろ入蕉

才木ゆそうぬく梅のひこ生良

まうつるに日宮して

ひとつ売る女も寒う萩と方

おけばまた入るる

うせのまやう入古八有夜海

一矣こう落て

悩もうこけ我泊まり八秋の風

女幻菴

芭蕉

秋暑志ろ〻まで乳射乳飛加る

そ〻ろさまて秋の日の乳一泉

なるうも切社の末こる次て左仕

遠ろさひし乳村の生垣ノ松

秋猴治の門松なくて据る音竹憲

小捕の清水むさ〻ぐれ語子

七〻う生長せ〻も峡れなん雲口

鳥放ちやるにしの栗原乙州

詠あま人ふ〻ま通ある色して如挿

ともし消ゐをい雲に出る月北枝

肌さ〻を支さ志る冷しる兄良

とのうえ本まほし秋る稲流志

二つ座いまうふ乳中と緑組て泉

さ〻ら守由る岡の堤月蕉

糸こうて寝ち小袂淫ま衣枝

あしたふむできさ〻ふ心のまち口

そよ乳戸の花もうつる此花そ浪生

畑う乳てもおうて営ま良

あうしくと只つれなくも秋風

印の半

歡生亭

ぬまてゐ人もおろや乃れ萩
為うられよすれふく家 享
方又そ掘もをを紅上て 曽
干ぬるひ〳〵祇約うめる 北
扣の風重麻の姿れいまぬ ユ
書〳〵へて馬の一むれ 志
日祇徒る湯本の宮も此る 爺
下戸よもとせて辛紅酒杯 藁
紫の古紅錣もちられり 李
五の地義よ松うそや 祝
晩発よ鳥の声もる文り 夕

欲祇をむる窄雲の紅 樵
肌の衣女のうそりる 将
ふぬをれて我うる 蛆
よりかる本うり出候声 枝
雷あうふ塔のふにほり 良
芽よそめ井めらもおお子
加家さもる秋の加うは 邑
扱もそう出ふい声乳あふ 市
むうを為る有れ市 陵ト
あうかる花よ来ぐ仁近 生
雛うる雲 通たる〳〵 三

燕歌仙

馬うて燕おひれるれ 裴

そふ肥そそる心の曲りめ　曽良
力よと角力小将落ぬれて　芭蕉
鞘そそとやそそるけり　枝
青開き林のおこむ水の音　良
紫刈こうた業の笹通　蕉
憂るひそうの心に愛す寺　枝
拉女に五人田舎そそらひ　良
底なよ恋しき思ふ名もうて　蕉
髪ハ剃ら孫と魚食ぬ心　枝
蓮の糸そるも中し罪深き　良
先祖の負紙たそくたる門　蕉
有明のそうれ上座そこかた　枝
秀まりそうぬ掬の弓竹　良
あそ風いものえぬそれ洞そ　蕉

志ろそ狂のたくく葬れ　枝
花の香、右そ都の町造り　良
玄仏のこせる玄仏の箱　蕉
七宝さやそそうそ新波の頁を　枝
狼の小鍋を出し芹や花　良
まよそうに志それのほうお拝び　蕉
笑しれそのそく底面　枝
住そ小祖差お愛の声之　蕉
飛差人ふる人の柔畠、　
眺そそっ差に居て休さよ　枝
あられほそる二日月の振、　
初雪ん草れ拾そ降りて　蕉
小ぶくもちっく伊勢れ秋風、　
乾癖の素名日永そそう之　枝

雨そゝぎ枇杷つゝる之、
ほそ長き仙女の姿たとやらん　蕉
あうねをしほる水の白波、
仲保うつゝ治のうつゝとお染の　梶
寺まよ供をたのむ口上、
殊つきてねいんねも出ぬうつゝ　蕉
酸和人とやもしをれ　掌
萩の枝
一ふりえこぼるゝ萩の枝うれ　路通
むしのひゞきも弦月の下　菊夕
紙ぶもむつゝまるゝ寒夜　白之
うつゝにたゞむ夢ぬゝ残夜　芭蕉
梶木花小朝寒かゝん
食のそゝめ幸いおほえ　曽良

肌めさて人ふえさそう夕間れ　夕
児そゝぬさ手時のおりに　仏通
たきあのりふりに涼し　破笠庵　良
ほそ紀ふうして投業ようひ入　木因
葬ま花もとく鳴まきり　夜
方えぶりし　掘の装束之
さゝりしの貝拾ふそう布ふそう　蕉
地獄絵ばく掘の衣さ　通
さめしれ月に袂を照えん　因
絶う恒根ふふやむもいけ　夜
至腐ひくるゝやめ卿の花之
そうの菜そうと住おしん菴　蕉
おそうきやふり蛸なたて　夕
おしおえる宵れ月星　良

名まくら秋に染つむかれし 夜
けさうさに分我妻こもたる 通
あをてたのむたよりかな 孫 蕉
掛うたひにおかひこめる之
うさい無野ふうの世して夜
寒をつつう人よ 絶す 通
田と雲ふてわひしくもか紅葉つ 蕉
大風こうる森の入り口夕
ゆや辻堂のうろ杉梢上ヶ 通
うらもれて疫病送る翁ほけ之
麦もかしけて一すれ降 蕉

夜るとゑて近うさうさ
胡蝶くくる 歪 の 新 華

雪の朝二社にて実盛の甲
張れさん状えて

むさんやれ甲の下れさりしす
山中温泉

山中や菊ひくをの湯の匂ひ
笑ふ女つけて

松の木丸をもちふる秋の風
ろろろろろろ

今日ろうや牛村酒うん笠の影 曽良
ゆうしてたうれおもふ秋の糸
金閣寺

庭掃て出るや寺ふ葉やれき

よしすかう社風こゝやう丹山　曹
　　山校こゝろ
おさて月ひさこゝく余波れ
　　幸江社
月清し遊行のもてる砂の上
名月や小金日和宮ゆなれ
　　徒の吟
月いつこ雁いこつゝる海の色
　　如水子社
菊屋て木のこ草ゝこ拾ふ
　　木因亭
かくれ家や月こ家こに田こ反
　　如行亭
やせ蛙こゝろ負けるな一茶こゝ

千鳥掛

和泉の国の我宅にて

ようこおや崔ようこ脊戸の栗
森よえかる此家苅萱　和足
なけ法を魂の編掛芳こて　安信
風呂焼よ月のたけほの蕎
枝垣のたあこをこ紀鴨尾　足
よ月哀下りて紙よ打つく　信

いせの辺えねんこて

姥の二見よつこれゆ秋を
そこそこのこれ押あひぬ帰よえ

長尾作

和時雨猶も小さの蛙哉

多胡碑集

いさよふもはてさうな雲雀　芭蕉

打ぬよをさそふて水仙　良品

羽音の風やむ迄よ動ずして　指月

居をゑらひ〳〵むかの挟迯　之園

雁の声養のかりがねぞ　古芽

さら〳〵荻の笹のそよ栗　半残

雞頭の花おもふまゝをそ　品

そこの食うちの蜘のうるゐ　蕉

名ばかり屠斗庵塗つる壁　園

住れゐるをけよ西のま拔風　風

あ、紙志のひしほ汁こみて　浅

猪もそろそろ列をなす芳

馬の音傍宰迄のとりこし小蕉

方入てふる不二のいさゝか風

秋うせの籬ふる〳〵やもて品

簫ふようなる薮の山雀園

庵をれい家にぬるゝ花の笠芳

羽織そろ〳〵ま、未来蕉

袂をて耕を有そうやその風

首の花なる頼朝の一雀残

和雲よまの下れ匂ひ出るうな蕉

ふ、事多〳〵東坡の客品

芸生〳〵君の幸悟跋ふ法こゝろ園

林そうれよ筑ふ人築の戸風

痩る時も別をい安ゐ波れ音芳

風雅仕上ル酒のこれ寒し　蕉
世の中へ機嫌果る旅衣　品
ふとゝぎすこれへ佛切たき　殘
孤獨焼へ月猶ほしてふと　風
僧の鉢判る盃の夕雪　圃
おもふ〳〵なをもふと踏あて　蕉
是うまと畔ゟ絹たる　風
生れ来て煙ゟのようあるも乳樂　品
去ル繁ふうにおるこうつる芳　芳
左義長のたゝこおさまりそこ待　殘
ふるく雪ゟ是をとる　圃
金屏のおのたひやそうり
ふるうて

ふる雪やいつ大佛のけら三　芳
洛西堂
浪花津や四すみふさも冬籠　圃
志ゝしろうれみる人衆
ふくさめて
生いそく梅をふのそうり　殘
落柿舎ゝ
七嘯ゝ墓もろう秋ゝれ
幕末せ糸似てもさせん秋吟　去来
行ゝれおその市にゆく鳥
元禄之年
萬代ゟゝ行人いようれのち
ゟをめる
暗ゟ扉のたくものゆう雲

時雨てや花やさそふ檜笠　園女
　　こえの出ぬ社おそうて
うとかれうーほ鳥浦堅

俳諧集

太神宮法楽

伊の木の花もさそふに匂ふれ　宗祇
声よ朝日残念むうとひす　孟光
まちふる紅葉の掛ち雲とれて　又玄
二条の董卿幸行ふり　雲竜
有明のそ紙を指よりつゝみ　勝延
廉売とおふれ教のあつ夫　清里
釣り掛よ嵐のおふるまて　光
細めふる田の中れ寺　蕉

山路来て清水ながるゝ神の汗　庵
物ふく寒し我たのむ樹の破とれ　玄
女のこゝろ紅粉館の破とれ　蕉
碁よ打つきて囲為一つ　延
いねうてに酒とくるふお思ひ　野人
陳のかうをよ伊のうりて　光
ちうちにのほまと存を教と　里
はしめてはる岡の初稲　庵
漏る月残ふ機織る窓　玄
藍のしみつく指ふくそらん　蕉
神役よ雇ヤトヒ来ぬる浮連時　光
返ふ小法するさめの伊人　延
急よと沈のおやめ我おねて　延
水鶏と追よ起ーー　嘆　玄

多葉粉吸ふ一角の紅の烟る　港
雀うら赤あをおうるさと　里
あさうみて楽の一と伐脆えて　蕉
釣りのまるの浦ハさひろう　光
声をう春表ら残る秋の悔　玄
志ろう風よ眼表吹ちる　迩
笈うみて扶角付ら人　人
ころもをさむ衣雪もおれ　港
親ひろ茶よう紀水と欲づる　光
まりうた瓜茄子代おす　蕉
山坊城ほうきたるあうそ　正木
ゆうこむ擢よう柴たろう　玄
そのくぬれう法よう玄引撲め　迩
経冊のこと外雑の昏　人

一幅半

紙衣のぬるともおろむ雨乾　芭蕉
そそそそそり波ら水のおよぬる　乙峯
酒売う私さん掃よ埃売て　一有
板屋ろ〳〵のまろふふお　杜岡
ゆう暮の方さて傘ら干て運　鷹守
馬よ西瓜ら伐けてりあう　葛森

○此末芭蕉翁の句ありけり
稲妻のひろてまれいを投て
雲中のこうを行雁をもく　蕉
ゆうへよ堅とかる邯人
命そとろうの速救を悩ふ
汐八手てゐる文ろ須磨の浦

日おとに智る家城ありて、
元食幸る橘の木ぬけ中
望〳〵て九雪かうれ尽もこつ、
目前のけ〳〵紀こ行詩が能、
八つふふるなの新活けおろう、

陽をや集加の系好す客る
若垣の庵いそのうえなるの
やへさくの科よつけて
ろるとうひたうこめれ
一里ハこれ花をのる孫うや

おくひいおふこえつ花さうり　去来
もこ雀吟中の拘よやれ〳〵の声
悦うよこさけいれそろをの声
　呂丸をそひ
尚伯よりたいれい塚のすこれま

巳の光　そ也筑

種芋や花のさう秋雲あろく
火燵ふさけハ風こるあり　半残
酒好のかーらと信ハ氏まれて　土芳
ぬれくるれ華の衣　良品
有明の七つ気ある茶院ま残
ひさこの札と附るこうり　蕉
ひる風ま柱の戸こる稼て　品

去来

おもひおもふて花さそう
ちる雀哉中の拘子やわらの声
惟然

名丸をさむ
尚白よりたづねし頃のすゝれま

巳の光

芝石

種芋や花のさう紙雲あらく　半残
火燵ふさけば風こそあり　土芳
酒好のかしらを結ぶ冬ごもり　良品
ぬれてくるるは葬の衣　良品
有明の七つ気ある茶院哉　残
ひさごの札を附るそうろう　蕉
ひとり住む柱のとこちる秋の　品

小伝の薙よりここへそろ　芳
やそくと矢洲の汀氷り行　蕉
多賀の杉もいのこる残　残
ま松のそこもおそき梅組　芳
人よりはく葬名にをし　品
萱竹のをもかくぬきて　残
秋なれ蝉の啼ふくり　蕉
方くまて石屋根まる風の音　品
こほをて青き蓝瓶の家　芳
ほさうほの花もよ像よ咲そて　蕉
猿の声来る水のうら処　残
猫も眼の六ツ枡（カキ）桟に四ツ多ク　芳
あとのをうひの織蘿蔔と切　品
からうとも病人あれい借そあと　残

なくやいて出る髪結ひ　蕉
そりくに俳友の形弦灰ちし　品
冬至の宴よお思ひまし次　芳
化粧もよそ〳〵も思ふ子ら　蕉
まこえ猿のにとふうく　残
朝々よ〳〵ひの多き脂まう　芳
いとあられふる外てえれ流　品
田蒐の稲倉ひあ〳〵方泥て　残
風ひえそむる年のえれ猿　蕉
蕪〳〵れ紙のえれそ被も　品
死そ人の何よ朱る〳〵き　芳
弁風や吹起されてかいえぬ　蕉
筆残落せい鳥吟出す　残
ちり〳〵とひと一の花よ指ひ　芳

七　書家よ百の大雅うちろう
ひさご

花見

木ぬれとふ付も発もちくしま
西日のとそ小雑天まこ
弦人の風うれりまる
くれもあくハぬを刀の鞘
月まちて假の内裏の司石
救臼はくる払うくやうさ
鞍垂るこ茅駒ま秋のまて
名いさるくにほり磐る雨
入り迎よ祐坊の涌湯多る暮
中うもせいのうれよ伏
うくる我唯一方へ

かうの杓佛よむ人ゑ仏　硯
中しては大岡小居れい雲もふ　水
我名ハ里のふうものゝ　蕉
ふくやれていつゝぬ鍋の肝と爰　硯
月夜しな咽ろろる月　水
花をゝ紅ひすり拍ゝ拍て　蕉
打四方なる座の雪　硯
一爰の物むつゝと返り　水
医者の苦い飲ぬふう　蕉
ゝ乳咲ハ労肚ゝふ袋ゑ　水
恍よゝふゝまれ山中　硯

螢見

本ゝるえや私ハ酸ふて笑ふ

雪のおやみも泣笑ゝよ　凡兆
幻住庵ゝ
いえたのむ推ハ事もあり夜木立
ほゝおハ背中ゝてやふすと孙　曲翠
蛍ゝゑゑの上も岩の雫　乙州
夕ゝも胡ゝもつゝ瓜の花
指ふゆくゝな
掛のやうゝて来よ隣同ゝ
くつゝめの江ふうゝえの山　野水
海ふよ五月雨ゝや一ゝゝ　凡兆
彩迄紀岩梨をる月猿ハ足　千那
羽拉のやをゝふやゝ夜の山　洒堂
郭公ゝやゝ池水のさくゝゝう　大江
ゝゝゝやゝふ来ふ推ふ　加行

紙帳をおろして

おもふ事ふたつみつあり　野径

麦の穂をおしわけて

一笠ことしやう羽田のさと麦　之道

　　五月廿五日

やうてふぬけしからころも哉　丈

俳諧集

大津奇香亭

ひるの月のうら枝眠る垣ねかな　芭蕉

七ツて糸ほしわたる青簾　奇香

くれ方の新米炊ぐ煙にて　尚白

ゐよいよくのこる秋ひぐれ　自笑

松の木枕秋風さそふなり　通雪

孤松や絵て琴の糸ほそる　松涸

うかれたる女ふかれて月の穢る　香

矢数よ嵐のよわる急くさ　蕉

ふる家をたての文杖ふるふる　笑

物の栄ふるをかしけし　雪

やくこ芸ぬえまよう出て宿る　冥悦

住吉のおれ清ろろく寺　白

あらし吹ころとろる方二ツ　桐

枝を折よ蔭笠の雨江山

稲妻に社拝まれて　蕉

摸しおれ分の汗そ流るゝ　笑

菊活そ古歌いふ気の海うそ　白

雨の肥たる峯のさゝうひ　香

麦飯よ堂ろやうくなれん　雪

山
香
宣江
一龍
蕉
雪
香
白
香
同
白
江
雪
香

されたる宮ゐ孤の音寒
そり一大の過ぎゆくる松の枝
出ることそゝふみのもゝ雨
をんのこゝに歩く此里墓
追ふれて廉のまを捨てり
中の秋深く井戸代ゞり
三線ちゝ萩を踏ある
うさ人を蓼に浅き方ゝ
大勢ゞてをたゞれ女
一条もこゝなゝ小独う
妻のゝみ岩こゝ比殿の山風
ゝゝうこと雪ふまゝれこゝゝ
歯栗戸ゞこゝ帰る畷通
酸ゝ伯父の墓ゝゝ

旅の眸ゝゝ戸ゞ屋小来る
機ゝむ妻戸小花の雷を焚て
ゝゝ夏ゝゝゝゝの初ゝ
俳諧集

ゝゝ髪ぬく花の下やゝゝす
入日戸をゝ西宮の方
あま堤の鯛ゝゝる秋のまて
苅ゝゝくゝゝゝゝ栄
仙風小井の代のゝゝと
麦のふゝゝ戸ゞくゝゝ
称ゝて一むまゝる縄ゝ
順句ゝる意算の新
ゝ一戸の雷ゝゝ服ゝて
ゝゝ銀の雷ゝ所ゝ

芭蕉
之道
琢磨
蕉
道
磨
蕉
道
磨
蕉

山云事の竹の内うち弥 道
かふと谷うう踊絹きぬり 碩
有歌よ宴の芳名紙追うけて 蕉
翁もさてうも踏をうたく 道
をのふさも布ふみ重ねる風 碩
やうも弥生の末頃まる 道
時しふ花もうをめ新留 道
屋栗うう〜てを雀うをく 碩

合歓の木のなうしもてを宝ぬみ
草の戸をまれや稲葉に尾花
招の木よ鶯鳴なる娘のうち
　　其柳やうして
れうーろう松うもえよ有歌 士芳

紫田

病了の秋をくれて松ねる
落ぬ花小油売ぬう鳴く歌
附句中岡のたう様のうむ社
木枯や頬うれいうむ人の戸
　　智月尼

おれの庵のうれしや雪
新雪の雪ううやふゆう等　智月
　　幻住庵のうまれし
乾坤の名ううけうう家　其角
氏本戸や秋のうれてうれ月

七

猿養
うれねも刷ひつうひねみ雨　去来

一吹風のあの系去りますは　芭蕉
股引の朝うら洗う川施て　凡兆
たぬき狐柿を簾張の弓　史邦
陽てうたた寄迄うき寝の宵　蕉
人うもうれをうんあの栗　来
書ふくる雲絶まうう秋れて　邦
うれてうろうあうやそれ空衣　兆
行李も空えのうちに納あり　来
里こえそうて年の見吹　蕉
月にまうう去年のねこ処うう　兆
茅屋のの花のうりくと寝る　邦
夜おいうれ出まされしを安　蕉
三里あまりの通うくまうう　来
味云も盧同う男居ふうて　邦

さ一本つきれう月の猿声　兆
苦ふうう花ようふるま水神　蕉
びうう乗し今朝の腹立　来
いちう紀よ二月ものも冷て霊　兆
雪まよ宝ここ路の北風　邦
火ふ月一れ雲れ雪る家雪　来
ほうこき戻ふ帰仕者だう　蕉
痩骨のまこ記志力ふ紀　邦
陳ら試うて車引こむ　兆
うこ人を折穀垣うぶらせん　蕉
いま年うこれの刀うし出す　来
せいーけよ掃て既ききち　兆
れをひ切うる乱れひひえよ　邦
青天よ有明月の朝日ーけ　来

湖あの秋の比良のみね　蕉
染ぬ今葛表葉ふれて秋とよむ　邦
布子着ぬ人風のうき　北
押合て痛こらへやこぶし抜　蕉
なくらのそこのやうさ糸紅葉　来
一こうそく融つくろふのそれ　北
枇杷のふるふ木のさま旅立　邦

俳諧集　園風

あるうさや雪汝を死ぬく救芳
なくう汝狂る指のきさ拇　梅額
暦よむ人ふた星も安く居て　半残
かくう杜丹の名汝ひろめけり　出芳
献しふ雪そるてその上るる　良品
扇の風汝はく人を奉まし　風麦

九十六

春まあく前後の朝汝さけ宰て　芭蕉
そこ非ぬるお監う義　木白
馬の鞍ふまくてまおろ揺(ユル)額　額
おこぶを玉汝泣迷縄の釈　配刀
伊勢の海まくれまふ縄をおろ釈　麦
敵の首汝れくる古　々風
村人ハ宰の道まくろて芳
鶏汝門後汝そるとかくう品
造り出汝今年汝酒も寿ぎ　残
方も名ぶりのやくを汝ほし　刀
咲くや溝ま穂菱汝生茂り　風
ふくえちく汝座汝芭蕉ふふ　麦
そまくの楽汝衣裂を汝抜て　蕉
出ーかけたる饅汝の汁　芳

この花よ涙とのほるも今晩　白
肩ふれぬる供のさゝやき　額
残る雪男になんほうり　風
放てたの汽を追ふ未る　麦
葬礼ふきほる、馬の糞うり　品
女咲そる井のうち　芳
陵朝の変れるの饅と配るそ　蕉
脊中ハきく汽うちける　白
きられる抜のゆふなる　額
多城ひくくろる猿沢の奥　刀
頭よそと話し鳥帽子傾け　白
ふくくろ一や残ん雲　残
七夕にう死をかーなる涙ふき　風
家売りて世ハあーれふき方　蕉

柿の木の枝もたゆ実を持て　麦
ゑてそそ降一名やこゑる　芳
修行者の跡よりひなる路つゞ　額
ゆ斗の星残ほくむ世くそ　白
雪の瓜あるり宮く帰ぬ人　残
松ハ一本山の秋ー　風
を食ーてそよくなる薦すゝ　蕉
雑ゑし迚を怖いるふれ　芳
春ゆいよろ〳〵酔のねーて　刀
おもはぬ方の歓冬残ほむ　麦
試ころい火を焚ふらふ独とそ　品
家王の来て死色ゑ名を問　白
引つくわやり階ふおたけて　芳
月の笠ふいてそろ〳〵夕雲　風

月代おそうそし髪うつる　蕉
降うちし麦のいさかひ　刀
壬生山家集　百歳
みそさゝいや小斗の早苗前
笛の音こほる暁の　梅　弐之
一ぱうひこ雀のまこと森る松たて　芭蕉
まいくれ苅し田面通けり　蒙牛
盃の名残おしたん雪汁方　村鞁
脱押ぬる紀秀の衣ま　堤市
云殿の簟の中の大もゝひ　梅額
素良の小祢宜も宿に下りし　蕉
挑灯とゝはせといひ諸声　牛
紙衣羽織をとこ一旬ハせ之
海しぬえより人多して　百

ふるさ名深のおとしく　額
有明の何おく暮ま雑とゝせ　市
米たくらさる青山の秋　村
ふなくひの綿を作ま　蕉
額ころま添へく出を白糸之
枝つきてのほれの坊ころ　額
空おくかまたとめ急ぐ　百
ころ汁来て猿に小唄戎ませる　村
窓ま簡の扉風ま昼く庵柳み　額
面うけまおかさたる唐団扇　蕉
教えのうち香風ま志らく　牛
ろうしとたくまれをのるを之
むくこる雀義くてゆく　村
繁雲の市ゝ降ろま酒買て　市

明日の発句の角も暗たり之

いふ妻こゑ満ふらふ渡しする　村

春ふけさいやそれおの級百

ふとも多うけくるる灰ばあるとひて　蕉

ちさけおまうつもる揉札之

打衣よ下ゝ和の烏帽子筑頼し　額

幕我志はれい皆けとる蕉

雑のうたくもれの血あれや之

細うの汲よもる陽々市

和まの射場やたんと弓挽百

鉈よは多すこれ一ふさ村

物の親

上卿亜そ

年日八非我友ゑとこ〻ろ　芭蕉

土民の供物納むる　示石

水之る芦の焼けりく雁鳴て　凡非

関よ扱らくる表揖の声　去来

ふまくをふふ月の旅人　景桃

秋よ実打る出食の秋　乙州

實入ること家放の早稲の赤ゝて　史邦

星近くふる馬の足　績　玄哉

押ふりて大ふれう多う解石

奉加よ出る僧の首　途　蕉

ゑく川や寒屋の土ことふしおゝ　来

右もたゝ荊咲々う　兆

洗濯よやとれ歩れ物う業　州

描のいうえの声も恨めし　桃

上いうえ下ハ志もとそ西呂　蕉

皆白張のふとはおろう　一石
高巣人よ公和をこそ方と云　智月
芙の海辺よ朝の浜焼飯　秋風
蚤下り麻たらぬ子に母ぢ　北枝
雨はろしと南吹こそあろう　来山
米俵隣つゝれ物もろう　桃妖
日残ろくてし匂ろい庭ら　蕉翁
ろろう後程うおふろ九十友　哉
れさくろして登迹ーろう　来山
閑ふる宮よ絵巻も残ろ　邦之
簾の里のおてゑしー丸　桃妖
雁帰ろうろろう死鳥鳴　石鼎
野中よ拵る舟の有たけ　春夢
有細く小雨よぬるく石地蔵　邦之
百

世ハ狩りて米芋焼て食ふ　兆
萩をふに落紙妻小家建て　蕉翁
あやの麻衣にふれよ日の影　石鼎
法しも小さき鞋い求めうね　来山
たてこの形の風よ動ろる　哉
芙白小蕨表をこそ花薯ろ　桃妖
庭よあへる鳥の羽をひ　邦之

元雑もろやの中せも宝時
糸を出て乙州う新宅よ
芙蓉移て
人よ家残ろハせて我ろーろ
乙州う家引をよて
ゆくとこえより梅やみの雪　智月